

ハンデイの壁を笑って

PC 用 ホーム ページ <http://www.suncompt.net/>

スマートフォン用 ホーム ページ <http://www.suncompt.net/sp/>

* 無償版 (本ファイル転送可)

目次

第一章	試験	一
最後の試験		一
思惑の採用		三
第二章	博士のサラリーマン	
去る・来る		九
始まり		一七
研修		二二
第三章	平社員	
新米社員		二六
初給料と初恋		三一
労働組合員		三七
喧嘩		四一
危険との遭遇		五五
娘の誕生と借家時代		六三
妻の病気		七七
第四章	管理職登用（有償版のみ）	
闘い		八六
喜びの家		九五

目覚め	一〇三
調査から探査へ	一一〇
専門家の集い	一一八
差別の中の教育	一二六
再会	一三二
第五章 部長昇格（有償版のみ）	
分社	一四〇
戦力の拡大	一五〇
鉄道林の始まり	一五八
博士と鉄ちゃん	一六五
尾瀬の地すべり	一七三
初めての仲人	一八〇
春の匂いと娘達の旅たち	一八五
統合とA E	一九六
第六章 降格の中（有償版のみ）	
燃える鉄道林	二〇八
降格への階段	二二一
リストラと疑心暗鬼	二二九
別れと出会い	二三八
我が祖国へ	二四六
平社員へ	二五九

第七章 復活への道（有償版のみ）

社長交代

二六八

再浮上

二七六

肉親との別れ

二八五

黄昏の鉄道林

二九四

再評価

三〇七

新しい世代

三一五

大阪への思いとの決別

三二一

思い

三二九

定年

三三五

あとがき（有償版のみ）

三四一

第一章 試験

最後の試験

「二〇〇七年問題」と言われる「団塊世代」が六十歳の定年を迎える二年前の九月九日、東京の後楽園にある日本測量会館で「空間情報総括監理技術者」認定のための面接試験が行われた。私は「呉太明」の名でこの試験を受けた。本来の名は「太朋」である。団塊世代の先頭で育った私にとって、この試験を「試験」と名の付く、人生の最後の挑戦と位置づけた。

その試験は、「測量技術がこれからの社会の要請に応えるには、空間的広がりを持つ地球上の位置と、それに直接的または間接的に関連付けられる様々な情報を扱う『空間情報技術』としてとらえることが必要となってきた。また、空間情報の仕様策定、取得、構築から、システム運用、データのライフサイクルにわたる情報管理など、広範囲な技術を駆使できるコンサルタントが必要となってきた」と言う堅苦しい歌い文句で、今年から始まった資格試験である。

受験資格は、①測量士の資格を有すること。②技術士の資格または博士号の称号、および同等の能力を有すること。③

空間情報関連業務に十五年以上従事し、かつ、当該業務の責任者の経験を二回以上有することであった。

いずれの条件にも該当し、「書類審査」と「筆記試験」にパスし、私は最終試験の面接に臨むことになった。

当日は残暑の厳しい日であったが、スーツを着込み、面接会場に向かった。面接時間は一人当たり十分間程度で、面接の順番は二番目であった。

試験官は三人で、いずれも「空間情報学」を専門とする大学の教授であった。そのうちの一人の試験官とは面識があった。

その試験官と知り合ったのは、私が四十歳前後に国が主導した「災害情報システムの開発」の一分科会であった。彼はその分科会の会長の東大名誉教授である。

三人の試験官は部屋の正面にある席に並んで座っていた。私は三人の目の前に置かれている椅子に腰を掛け、

「受験番号〇五の〇〇三。呉です」

と座ったまま一礼し、そう言った。

「まず、私から質問をさせていただきます」

と、右端に座っていた試験官が言った。

「今回の試験方法について、どのように感じましたか？ 答えして下さい」

「今日の高度な情報化の時代に合った格調ある試験内容であったと思います」

私は質問した試験官の方に目をやり、

〈自分より若いなあ〉

と思いつつ、間を置かず答えた。

〈初めて実施された試験であるから「この試験方法はどうか？」と質問するはず〉と予期し、自宅のある川越から面接会場へ向かう途中の電車の中で準備していた質問に対する回答であった。「まさに、待っていました！」とばかりの最初の質問であった。これには、三人の試験官は互いに顔を見合わせて一笑い、何やら机の上に置いてある紙にペンを走らせていた。

〈これは、行けるぞ！〉

と、私は心の中でつぶやいた。

筆記試験は、受験者自身が準備したノートパソコンを使用して、答案を作成するものであり、インターネットの利用が自由で、専門書を持ち込んでも良しとした、ユニークなものであった。恐らく、受験者全員が経験したことのない初めての試験方法であった。

最初に笑いを誘ったことから、質疑応答は順調に進んだ。が、五分が過ぎた頃、

「呉さんの出身は、中国ですか？」

と、面識のある教授が初めて口を開いた。

〈受験願書の要件である国籍の欄に「韓国」と書いておいたのに：〉

と思いつつ、

「いいえ、韓国です！在日コリアです」

と、キツパリと答えた。

質問した教授は、六十半ばの歳であった。日本の測量分野では大ボスの存在である。この世代の知識人は幼い頃に日本の敗戦を肌で感じ、小学校から戦後の民主主義教育を受けたせいか、朝鮮や韓国と言う言葉に何となく遠慮があるのだろう。

十分ほどが経ち、面接時間が終わろうとしたとき、

「専門書の共同執筆に協力してくれませんか？」

と、名譽教授が言った。

「喜んで、お手伝いをさせていただきます」

椅子から立ち上がった私はこの執筆の誘いに対して、力強くそう返答した。消極的な返答をすれば、試験結果に影響を及ぼすのではと、一瞬思ったのであった。

ところで、受験願書の氏名欄に「太朋」でなく「太明」と書いたのは、それなりの理由があった。母親が私の「出生届」

を大阪の東成区役所に提出した際に、受け付けの職員が「太朋」を「太明」と書類に誤って記載した。当時は今よりも「朋」より「明」が一般的に使われ、「朋」はなじみの少ない漢字として、その字を知る人もあまりいなかった。母親は、韓国の済州道から日本に渡ってきた在日一世である。九十九年間の生涯を通して、日本の文字は読めなかった。このことからして、その間違いに気付くはずはなかった。間違えられたまま持ち帰って来たのであろう。

私は、幼年時代から「テブン」と近所の大人や子供から呼ばれていた。「テブン」とは漢字で書くと「太朋」であり、「太明」は「テミヨン」と読む。

やはり、本名は「太朋」である。しかし、一度登録した名前が「太明」とした場合、一生その名が公文書では使わなければならないのである。このようなケースは、私の同世代の在日コリアンには珍しくはなかった。多くの在日コリアンは「通名」をもっていた。「呉」が「呉山」とか。「高」が「高山」や「高田」とか。「金」が「金村」、「金田」や「金山」とか。姓だけでなく、名もそのような日本式の呼び名があった。いずれにしても、日本企業でサラリーマンになったときから、私の人生に「太朋」と「太明」のややこしい関係がずっと続くのである。ただ、信念からか? 「太明」としてもフリ

カナには「テブン」と書き続けた。

面接試験が終わった。(何とか行けそう)と言う直感を抱きながら帰途についた。高田馬場駅から本川越駅に行く特急「小江戸号」に乗り込んだとき、雨が降り始めた。雨滴がガラスに矢のごとく当たって流れる車窓から、受験願書で勤務先としたA会社の建物が見えた。

「二十七年前に、この建物で今日のような面接試験を受けていたなあ…」

私はこの会社で面接を受けたあの日のことを思い起こした。あれ以来の面接試験であった。

思惑の採用

一九七八(昭和五十三)年十二月十二日、私はこの建物で就職のための面接試験を受けた。人生初めての企業面談であった。面接を受けたのは三十一歳のときである。

名古屋から新幹線で東京駅に。東京駅から池袋駅へ。池袋駅から西武池袋線で所沢駅に着き、西武新宿線に乗り換えて会社のある最寄り駅で下車した。駅舎は一階建ての古びた木造で、濃いひげを生やした中年の小太りの駅員が一人、改札

口で切符を切っていた。

「Aと言う会社はどこにありますか？」

と、駅員に切符を渡しながら尋ねた。

「駅の外に出れば、すぐにわかるよ。目立つ白い建物だから」

と、駅員は切符にパンチを入れながら、うつむいたままで返答した。確かに駅を出てみると、すぐにわかった。駅の周辺には大きな建物がなく、畑地が散在し、その白い建物だけが目立っていた。都会暮らしの長かった私は、

「ずいぶん田舎だなあ…」

と思わず言葉にした。

午後一時から面接が始まった。この会社の総務課長の案内で会議室に連れられた。会議室に入ると、正面の席に七、八人の試験官がすでに座っていた。試験官に向かって一礼し、彼らの席と向かい合って置かれている椅子に座った。試験官の誰一人面識がなかった。ただ、その試験官の中に中山と言う人物がいることを感じ取っていた。

中山は、私が在籍する研究室の教授である岡田の後輩に当たる。「砂防の専門知識を持った人を探している」と言う中山からの頼みで、岡田教授が私をこの会社に紹介したのである。中山が年齢四十ぐらいで、肩書きは部長であると教授から聞いていた。

椅子に座るや否や、質問が飛んだ。始めのうちは、

「趣味はなんですか？」

「囲碁です」

「特技は？」

「剣道です」

「家族構成は？」

などの面接と言う名の下の一般的な質問であった。が、面接が半時間過ぎた頃、

「尊敬する人は金日成か？」

と、正面の真ん中の席に座っていた最年長らしき小柄な人物が尋ねた。これには一瞬返答に困った。常識的には面接の設問では「尊敬する人は誰ですか？」であるはずと固定観念があったからである。前もって「金日成か？」と聞かれるのは予想外であった。当時、私は北朝鮮を支持する「在日本朝鮮人総連合会」に属する「在日本朝鮮人科学技術協会」の一会員であり、当然その国の「金日成国家主席」を敬っていた。

「G防災技術会社の申先先生です」

と、とっさに答えた。

「なぜですか？」

「申先生は韓国に生まれ、ソウル大学を卒業した後、日本の東京大学で博士号を取得し、取得後、外国人と言うハンディを背負いながらも、B防災技術会社の発展に大きく寄与しているからです」

金日成を尊敬しているかどうかには答えなかった代わりに、「申」と言う名を口にした。

一度「某学会」で岡田教授から申先生を紹介されたことがあった。当時はその会社の技術部長を務め、「地すべり」の分野では日本で第一人者と自他共に認める人物である。「G防災技術会社の今日の発展と存在には申部長の貢献度が大きい」と岡田教授から聞かされていた。

さらに質問は続いた。この面接を仕切っているのは、「尊敬する人は金日成か？」と尋ねた人物であった。後でわかったことであるが、当時技術部門の取りまとめを担当していた常務取締役の竹田であった。十年後に、私は「尊敬する人は金日成か？」と、そのような質問を投げ掛けてきた理由を面接する側になって初めて知ることになるのだが…。

竹田常務は、黒い眼鏡を掛け、頭髪をオールバックにした人物に技術的な質問をするように促した。

「何せ、面接の相手が博士になる方だから技術的な質問はあ

りません」

と、促された人物は竹田常務に対してはべもなく返答した。この男の言葉にほっとした。正直、博士だからと言っても民間でやっているような技術的な内容についてわかるはずがなかった。感謝すべきこの人物は後に私の担当役員となる黒川であった。

「できれば、来年早々の一月から来て欲しいのだが？」

と、面接がそろそろ終わろうとした頃に竹田常務が言った。面接の場でこのようなことを即座に言われるとは思ってもいなかった。

「申し訳ありません。今、学習塾で中学三年生を教えているところなので、生徒達の高校入試が終わるまでは辞められません。お世話になっていいる塾長に対しても格好が付きません。しかし、入試試験は二月中に終わります。三月になれば、来ることができると思いますが…」

少々まごついたが、少し間を置きそう答えた。すると、竹田常務は少しの間黙っていたが、

「それでも結構です。しかし…、君は義理堅いなあ。日本人よりも日本的なところがあるのだなあ。また特技が剣道とは――」

と、うなずきながら言った。

「察するところ、この人物が私を採用するか否かを決定する権限を持っている人物なのだろう」

と、直感せざるを得なかった。しかし、「君は義理堅いなあ。日本人よりも日本的なところがあるのだなあ」と言った竹田常務の言葉に

「義理人情は日本人だけにあるものではない。人なら誰もが持っているものである」

と言いたがったが、その言葉を心の中にしまい込んだ。

面接は一時間ほどで終わった。面接の間、中山と名乗る人物から質問はなかった。私は総務課長に面接会場から別室へ連れられて行った。総務課長の名は谷川と言う。

「私は中山部長とは名古屋の同郷人です。中山部長の方が年上ですが…」

と谷川が言った。

「中山部長は面接の場にいましたか？」

「一番端に座っていましたよ」

「ああ、あの人でしたか。眼鏡の掛けた方ですね？」

「そうだと思います」

並ぶ試験官の端に座って、黙って聞いていた頭のはげた人物を思い浮かべた。

「そうだとすれば、この二人の同郷人は頭のはげ方も同じだ

なあ」

と、額から頭のとっぺんにかけて禿げ上がっている谷川を目の前にして思った。

「ところで、なぜ竹田常務が採用を急いでいるのかと言うと、我が社は昨年度から建設省が全国的に進めている『土石流危険渓流調査』の仕事が急激に増え始めたからです。ところが、この仕事に対応できる技術者が少なく、これからの先を見通して『砂防』の技術に精通した人材を即戦力として欲しいところなのです」

と、谷川は竹田常務が言った「来年早々…」と言う理由を伝えた。

「そうだったのですか」

小声でうなずいた。

「ところで、博士号は確実に取れるのですか？」

と、谷川が強い口調で尋ねた。

「大丈夫です。今月中に何とか取れます。残っているのは授与式だけですから」

と、谷川に言い切った私は、

「博士であることがこの会社に入社できる俺に対する条件か、または担保と言うものだったのか…」

と初めて悟った。

大学に戻った私に、採用の連絡が総務課長の谷川からあった。その数日前に、博士号が取れたかどうかの確認の電話があった。博士号は、その年の十二月末に学部長から授与されていた。

翌年の一月十六日、成人式の翌日に入社手続きと住まいを探すために、川越に向かった。このときの旅費は会社持ちであつた。面接のときは「会社訪問」の形であつたとし、旅費は支給されていなかった。

「今回は、家探しに時間が掛かるだろうから、横浜の李龍吉のところに一泊して来る」

と私は妻に告げ、彼に就職の報告も兼ねて立ち寄ることとした。

李龍吉は大学時代からの友人で、一年先輩に当たる。工学部を卒業すると同時に、コピー機などを製造・販売している日本の大手企業に就職していた。彼には妻と五歳と三歳の二人の息子がおり、横浜に住んでいた。彼は、私の知る仲間のうちで、最初に李龍吉と言う本名で日本の大手企業に就職した人物だった。

この時代（一九七〇〜七四）には、電気メーカーの「日立」で在日コリアンが就職の際に国籍を偽っていたことが発覚し、

内定を取り消された事件があつた。これを民族差別として在日コリアンと日本人が共に闘った「日立差別就職裁判」が起こっていた。在日コリアンが日本の大企業に就職することが難しい時代であつた。

再び、私はA会社の技術センターに、冬コートを着込んで行った。底冷えのする日あつた。会社の一階の玄関近くにある総務室のドアをノックし、

「失礼します！」

と言いながら、一礼して部屋に入った。入ってきた私に気付いた谷川は、

「待っていましたよ！」

と立ち上がって、笑顔で迎えた。総務室には女性を含め、総勢十名近くの社員がいた。私は谷川から入社に伴う必要書類関係について一通り説明を受けた。「契約書」や「雇用契約書」などの提出書類を書いていると、やたらはしゃぐ男がいた。女性社員にジョークを飛ばしては部屋中の者を笑わしていた。この会社で初めて出会った同世代の男性社員であつた。周りの社員から「金ちゃん」と呼ばれていた。私は彼の方に目をやった。偶然、机に向かって座っている彼と目が会った。彼に会釈をした。彼も会釈を返した。彼の名は東田金助と言

い、年齢は私よりも一つ年下で、経理を担当していた。このとき、私が五十歳代になる頃に、この男と同じ部署で働くことになるとは想像もしてはいなかった。

私は書類に名前を漢字で記入し、フリガナを付けた。

『呉』のフリガナは『ゴ』ではないのですか？『オ』なら、『ー』を足して『オー』と書いてくれませんか。その方が日本人にしては呼びやすいので…』

と、谷川は書類のフリガナの欄をのぞきながら神妙な顔つきで言った。

「そうですか…。わかりました」

「オ」の後の空白部分に、「ー」と言う字を付け足しながら

『郷に入っては、郷に従え』か」

と自分自身に言い聞かせた。

保証人の印を必要とする「身元保証契約書」を除いては、その日に提出できる書類を書き終えた。そして谷川に手渡そうとしたとき、

「帰化して日本人になった方が得なのですがね。出世にかかわりますよ。呉さんの気持ちご理解できません」

と谷川が言った。この言葉を聞いた途端、

「帰化するぐらいなら、こんな会社に来ていない！」

と怒鳴り返したい気持ちになったが、しよせんこの男に話しても理解ができないだろう。話すだけ時間の無駄だけであると思った。このようなことを言われたことが博士論文を書き始めた頃に実際にあった。

「帰化して日本人になるのならば、大学の助手の席を用意するのだが…」

と岡田教授から言われていた。しかし、日本人に帰化するなどは毛頭なかった。

「ハンディを背負いながらも、在日コリアンとして生き続ける」

と言う信念を持っていた。この数年後、日本の法改正（昭和五十七年「外国人教員任用法」）により、外国人にも国立・公立大学の先生の道が開け、在日コリアンである友人の二人が国立大学の先生となった。

（もう少し待てば良かったかなあ…）

この会社に就職した私は、このことを知ってしみじみと思うことがあった。

第二章 博士のサラリーマン

去る・来る

一九七九（昭和五十四）年二月二十五日に、九年間過ごした名古屋を発ち、川越に向かった。妻と三歳の長女と生まれて三ヶ月になる次女を連れて…。

引越しの数日前の日曜日、私と妻は名古屋の友人達との「別れの会」を、築十年以上は経つであろう木造平屋の自分の借家で催した。

「別れの会」には、私より一つ年上の朴安成とその妻、同じく安政治とその妻、同じ年の洪基弘とその妻、同じく南大三とその妻、一つ年下の金泰一とその妻達、総勢十数人が集まった。彼らは幼年時代から経済的に貧しく、差別と言う痛みを感じてきた「在日二世」達である。この数年後には、男達は農学博士、工学博士、医学博士となる。南大三の妻は医学博士となった。

それぞれの夫婦に子供が生まれ、彼らの子供達が今の親と同世代になった頃、男達は年一度の泊まり込みの「集まり」を作っては、このときの生き方を過去とし、現在と未来について酒を飲みながら議論を交わしあうのである。黄昏の友情を

深める「在日コリアン」の特異な立場のエリート達として…。

私が住む借家の間取りは、六畳の畳部屋と五畳の板間に台所が二畳ある程度である。月の家賃は二万円であった。

「別れの会」は、六畳間と五畳間を仕切っているふすまを外し、両方の間をまたいて並べられた二つの座卓を囲んで飲み食い、昼間から始まった。「宴」がにぎやかに進んだ。私の妻が数日前に名古屋駅の裏にある朝鮮・韓国の食料品店から材料を買って作った料理がなくなる頃、一人の男が顔を真っ赤にしながら立ち上がり、

「いずれは、社長になれよ！」

と、私に大きな声で激を飛ばした。

激を飛ばした男は、独身時代に私と朴安成の三人で、飲み屋の多い歓楽街の「今池」で数年間共に暮らしていた洪基弘であった。三重県出身の朴安成は同じ大学で「半導体」を研究していたが、洪基弘は大阪出身で「粉体工学」分野での研究を行っていた大学院生であった。彼は酒が入ると、常に仲間達の間では最も口数が多くなり、話の中心的存在となるのである。私はこの男の話を聴くのが楽しかった。まるでそれは、漫談を聴いているかのようにもあった。

洪基弘のこの激の言葉で、一同はグラスを手に持って立ち

上がり、

「祝杯(チュッペ)！」

と、朴安成の音頭で皆がグラスを上げた。そして「別れの会」は終わった。それは夕暮れどきであった。友人達は借家から去って行った。妻達は寂しげに、

「アンニョンヒ(元気でね)！」

と、私の妻に対して去り際に言葉を掛け、別れを惜しんだ。妻達は「私の妻とはこれからいつ会えることだろうか？」と感じていたに違いない。男達は仕事の出張先で立ち寄って会えることができて。

出発の前日、私は妻と連れ添って、大家さんの家に訪ねて行った。その家の門には百年以上は経っていると思われる黒松が植えられており、門から玄関までの間には踏み石が何十個も敷かれていた。もともとは、この辺の田舎の地主であったとわかる邸宅であった。

玄関のチャイムを鳴らすと、五十歳に近い婿養子の家主が顔を出した。すでに知らせていた関東の地・川越への引越しの挨拶をした。

「上の娘が今年小学六年生になるので、『呉さんに家庭教師をしてもらおう』と、女房と話し合っていた矢先に……」

と、大家さんは残念そうに言った。

「ここにいたならば、喜んで家庭教師をさせて頂いていましたよ」

と返答した。

「いや！本当に家をきれいに使ってもらって有り難かったです。本来ならば、修繕費を頂くところですが、結構です」

大家さんにはこやかな顔でそう言った。

名古屋では、家を借りるとき「礼金」と言う名の金を支払う習慣があり、家を出るときはその金は全額戻って来ない。借りている間の家屋の傷みは、修繕費としてその損傷に見合った金額を払わなければならなかったのである。

結婚して、この借家に住んだのは三年余りであったが、昨年の夏場の大雨で、大家さんが貸している二十軒近くの借家がすべて床上浸水に見舞われたことがあった。このとき、私と妻は畳を机や座卓上に立て掛け、長女を連れて避難した。水が引き始めた頃、借家に戻ると、畳はぬれていなかった。大家さんが借家の被害状況を調べに来た。私達が住む借家の様子を見て、

「有り難い！良かった。前の家の住人は畳をそのままにして、車で実家に避難しおった！畳はすべてぬれおった。使えもんにはならん！」

と言いながら、大家さんは私と妻に感謝した。

「畳を新品に替えるための費用を考えると、腹立だしかったのだろう」

私は長女を胸に抱いた妻にそうつぶやいたことがあった。このことが、その後大家さんに良い印象を与え、大家さんは修繕費を要求しなかったのである。

この年の二月中旬に、アルバイトとして塾の講師をしていた学習塾の塾長に「就職が決まったので、今月一杯で辞める」ことを申し出た。

この学習塾は同じ時間帯で複数の教室で数人の先生が同時に教えると言う、繁盛した塾であった。塾長は以前学校の先生をしていたが、定年となりこの塾を開いたらしい。

私が教えていた生徒達の高校入試がほぼ終わった二月の末、この日の授業を終えた後、塾長に最後の挨拶をした。

「良くやって頂いて、嬉しかったです。生徒達も先生に懐いていたようだし」

と言いながら、塾長は二月分の給料袋と「せん別」として一万円の入った封筒を差し出した。

「色々お世話になりました。また『せん別金』まで頂いて…」と恐縮しながら、深く感謝の言葉を述べては塾を後にし、最寄りの駅から電車に乗り込んだ。

「参ったなあ！またあいつがいる…」

あいつとは、塾から帰りの電車の中で、一週間前からまられた四十歳近い酔っ払いの男である。そのとき、その男は座っている私の前に立って、しつこく声を掛けてきた。うんざりした私は別の車両に移った。が、その酔っ払いも後を追って、同じ車両にやって来た。

（どうも、俺は喧嘩を売られやすいちなのかなあ）

と思いつながら、自分の座席の前に立っている酔っ払いをにらみつけた。

「何だ、その目つきは！」

と、その酔っ払いが言った途端、

「うるせ！この酔っ払い！」

と言いつ返すなり、立ち上がって酔っ払いを足払いで倒し、「良い加減にしる。死にたいのか！」

いきなり、倒れた相手ののだ仏を片手の親指と人差し指で締め付けた。その酔っ払いはそれ以上声を出すことができなかった。電車は次の駅に着いた。駅員と車掌の二人が開いたドアから急ぎ足で入ってきた。他の乗客が知らせたのであろう。

私は倒れている酔っ払いから手を離し、澄ました顔で元の席に座り直した。

「お客さん、大丈夫ですか？ご迷惑を掛けて申し訳ありません」

ん」

二人は酔っ払いを抱き起こしながら、私に謝った。

「何で、俺が連れて行かれるのか？俺はあいつにやられていた方なのだぞ！良いか、おまえに仕返ししてやるからなあ」と叫びながら、酔っ払いはホームの方へ連れて行かれた。

また会ったその男は、乗客が数人しか乗っていない車両の端にある二人掛けの座席でワンカップを飲んでた。少しは離れているものの、同じ車両の六人掛けの席に座ってしまっただけで、（やばい！）と思いつつも、急に立ち上がって他の車両に行くことはしなかった。かえって気付かれると思ったからである。目を合わさないように、うつむいたまま目を閉じて黙って座っていた。しばらくして、その男は途中駅で下車した。その男の後ろ姿を見ながら、

（もう、おまえとは会おうことはないだろう）

と、ホッとしながらつぶやいた。

たまに、私は後々のことを考えない言動に出ることがある。今風で言えば「プッチン切れる」ところがある。相手の言動が自分のプライドを傷付けたと思うと、まるでヤクザのようなドスのきいた言葉で、相手を怒鳴りつけ、手を出すことがある。

このような言動は在日二世に多い。これは民族性か、生活

環境から生まれるものか、それはわからない。いずれにしても、在日二世である私が日本の企業でどこまで勤め上げることができるか疑問である。

いざ！関東に――

名古屋を去るに当たって、一通りの挨拶を終えた私は、関東の地・埼玉県の新天地に、妻と幼い二人の娘を連れて着いた。妻は大阪育ちで関東に足を踏んだのは始めてであった。新居となる家は、川越市の旧市街地から若干離れた場所にある一戸建の家であった。

前回来社した一月十六日。家族が住める家を探すために、入社の手続が終えた午後、総務課長の谷川が私を会社の車に乗せ、まずは所沢市方面の不動産屋に向かった。

所沢市は、日本で初めて飛行機が飛んだ、日本の航空発祥の地である。かつては基地の街と言われ、市の中央部は広大な飛行場で占められていた。しかし、昭和四十年以降の高度成長を背景に急激に人口が増加し近代的な都市と変ぼうした。引越当時に人口は約二十万人を擁していた。この方面に住んでいるこの会社の社員は多かった。谷川もその一人であった。以前、会社は所沢市の西武鉄道の敷地内にあったことからのようである。

私は、何となく所沢市で住むことには気が進まなかった。街並みが近代的過ぎて、歴史が感じ取れなかったためである。

「他で、下町情緒のある街はありませんか？」

と、助手席から谷川に尋ねた。

「そう言うところが好みですか？誠に『灯台もと暗し』とはこのことです。それならば、会社の近くの川越市がそれにマッチします！」

ハンドルを握る谷川は笑いながら答えた。そこで、二人が所沢方向とは逆の、西武新宿線本川越駅方向に車を向けた。

本川越駅は終点駅であった。

川越市は、大正十一年に埼玉県で最初の市となったところであった。江戸時代には、徳川家康の関東入部に伴って川越藩が置かれ、川越は江戸城北辺の守りを受け持つ重要な地域であった。明治になり、城下町の伝統も残しつつ、明治二十六年には町の三分の一を焼失する大火に見舞われるが、直ちに土蔵造りの店舗を続々と建設し、平成に入って見るような蔵造りの景観を形成して行った。当時の人口は所沢市と同じ約二十万人程度であった。

川越市内にある不動産屋の社員の案内で貸家に向かった。その途中、往復二車線の両側に、土蔵が立ち並ぶ商店街を車

は通過して行った。車窓から見える商店街は寂れて、人影が少なかった。商店街の間には所々に路地があり、その狭い通路を挟んで古めかしい下町風の長屋が並んでいた。

「こんな商店街がまだにあるのか……」

と、私は心細げにつぶやいた。

そのうちに、この寂れた商店街の中の、壊れかけた土蔵を「飲み屋」にしているトンポ（同胞）がいることを、私は知るのである。

その商店街を通過してさらに北上して、信号機の付いた大きな交差点を斜め左に数百メートル行ったらところに目指す借家があった。その家は、二階建ての一軒家の建物であった。外装工事をしている最中であった。

家の間取りは、一階が六畳の和室と三畳ほどの台所がある板間に、風呂場とトイレが付いているだけであった。二階は四畳半の和室がふすまで区切られて二部屋があった。家賃は名古屋での倍の月四万円である。

「大人二人と幼い子供二人で暮らすには、広さには問題がないだろう。家から本川越駅まではバスに乗って約十分で行けるし、バスの便も良いと言うのだし。何せ新築の家だし——」

新築の家に住んだことのない私は、そう思いこの家を借り

ることに決めた。妻にも説得できると思った。

再び、不動産屋に戻り、賃貸契約を結んだ。この家は社宅扱いとして社長名義、すなわち会社名義で借りることとなった。敷金は会社持ちである。

いずれにしる、関東・川越の地を、これから生活していく場として踏んだのである。そしてその後の数十年の間、暮らす街となるが…。

この時代であったはず？有名な演歌歌手である水前寺清子が歌う、

「東京でだめならば、名古屋があるさ、名古屋でだめなら、大阪があるさ…」

のヒット曲の歌詞とは逆に、

「大阪がだめならば、名古屋があるさ、名古屋がだめなら、東京があるさ…」

と、私は埼玉でなく東京に来たと思っておきたかった。

関東の地に踏んでからは、大阪や京都にいる甥っ子や姪っ子には、「埼玉の叔父さん！」でなく「東京の叔父さん！」と呼ばれることが嬉しかったのである。全く子供のようなところがあった。

ところで、なぜ？下町にこだわったのか…。私は下町のど

真ん中には住みたいとは思ってはいなかった。ただ、下町に愛執を感じていた。

私が生まれて高校時代まで過ごした家は、隣に作家の梁石日（ヤン・ソギル）が住んでいた大阪のゴミゴミした下町の朝鮮人長屋であった。彼のことを「まさお兄さん」と呼んでいた。

第十一回山本周五郎賞を受賞し、二〇〇四（平成十六）年には主演ビートたけし、鈴木京香などで映画化された、梁石日の小説「血と骨」に出てくる隣の石原一家とは、私の母親と兄弟が住んでいた家のことである。

ここで、小説「血と骨」に書かれている石原一家について、そのまま引用すると、

「石原一家は寡婦の母親が闇米やみこめを売り、まとめ（背広などのボタンつけ）の仕事をしながら四人の息子を育てていた。夫は死亡したわけではなく、韓国で某大学の教授をしているのだそう。それが彼女の自慢だった。おしゃべりで陽気だがエキセントリックな性格だった。ソウルで別の女と暮らしている夫の陰口でも言うものなら、たちまち彼女の自尊心を傷つけることになって大喧嘩になるものだった」

『うちの息子達は将来、博士となる』と近所のおかみさん達に吹聴していた」

「兄弟の末の息子はいつも鼻水を垂らしていたが、いまでは鼻水も垂らさず、近所の子供達の中でもっとも聡明に見えた」
などが、小説の所々に描かれている。兄弟の末の息子とは私のことであつた。

なぜ、「呉」が「石原」と紹介されているのだろう。実は「石原」でなく、「石山」である。作者は都合上少々名前を変えたのだろう。では「石山」と名乗つたのか？

それは、戦前の日本の植民地化政策による「創氏改名」によつて日本式の姓を名乗っていた。しかし、父親の姓「呉」が「石山」になるはずがない。「呉」は「呉山」や「呉本」ならわかる。「石山」は母親の日本式の姓である。母親の本来の姓は「宋」で、母親の先祖は中国の石山と言う地から朝鮮半島に移つた一族であつたことから「石山」と名乗つたのである。父親の姓を名乗らなかつたのは、父親が別の女と暮らして子供を設けていることに、母が怒り「呉」に絶縁しようとしていたからである。女手一人で息子を育てている母の前で父親を

「殴つてやろう！」

と、私は幼年時代には長く心に留めていた。

ところが、私は父親の顔を全く知らなかつたのである。知つたのは五十七歳になつた年の、九十九歳で亡くなつた母親

の葬式のときであつた。

火葬された母親の遺骨を持つて、大阪に住む長兄の二階の部屋に三十歳に届こうとしていた長兄の次女と一緒に上がり、遺骨を床の間に置こうとしたときである。そこには黒い額縁に入つた男の写真が置かれていた。これを見た私は、

「この人は誰や」

と、いぶかしげに姪めいつ子に尋ねた。

「チャグナボジ（小父さん）のアボジ（お父さん）やで」

と、姪つ子は笑いながら答えた。長兄は母親に内緒で父親の法事をしていた。

「兄弟の中で、俺に最も似ているな……」

と、私は写真をしげしげと眺めながら姪つ子に言つた。

これは「本末転倒」である。父親が息子に似ていると言うのではなく、息子が父親に似ていると言うのが道理である。しかし、このようなことを言うのは、私が母親の手で育ち、五十七歳にして初めて顔を知つたからであろう。この父親は他人のように思えたのである。

小説「血と骨」のタイトルは、朝鮮半島のことわざにある

「血は母親より、骨は父親より受け継ぐ」と言うことから付けられたようだ。

『血』はその親の血の通つた人間性を受け継ぐが、『骨』は

家系図のようなものだ。背骨は本家で、あばら骨などは分家であるかのような、ただの姓の継承にし過ぎない！」

私は自分勝手にそう解釈していた。

少々、余談が長くなったようだ……。前日、狭山湖にある国民宿舎に一泊し、朝に家族が暮らすことになっている新築の借家に到達すると、総務課長の谷川が借家の玄関に立っていた。

「おはようさん！」

と、私達ににこやかに声を掛けた。普段着でネクタイをしていなかった。谷川は暖かそうな帽子をかぶっていた。その姿は会社で見たときよりも若くは見えた。

〈はげ隠しか〉

と、谷川を見て思った。

私は帽子をかぶるのははげ隠しのためであろうと、当時は思い込んでいたが、歳を重ねると共に、周りのはげた同輩から「禿げるとなあ、頭は夏になると暑く、冬になると寒く感じるから、帽子をかぶるのだ」と頭髮の熱の調節効果を教わるのであった。私の頭髮は天然パーマで、雨などの湿気の多い日には髪が見事にカールするのである。この癖毛は父親譲りかもしれない……。

引越しの運送屋がトラックで到達する前に谷川は不動産屋から事前に受け取っていた家の鍵を使ってドアを開けては一階の部屋に敷かれている真新しい畳を乾いた雑きんで熱心にふくのであった。妻はその姿を見て感動したものであった。

その後、谷川の名前が出る度に、

「畳をふいてくれた人か？」

と聞くのである。

会社から指定された西武運送のトラックが名古屋から持ってきた引越し荷物をすべて下ろし、重たいタンスや食器棚、冷蔵庫、テレビなどを部屋の所定の位置に置いて去った。

「三月一日の出社をよろしく。九時前には来て下さい」

谷川もそう告げて、会社の車を乗って去って行った。私と妻は上の娘を外にやり、下の赤子の娘を部屋の隅に寝かし付けて、荷物の整理を始めた。一日では荷物を片付けるのは無理であった。

「会社に行くまでに、大体の物が片付けられれば良いだろう」

と、二人は話し合った。

その日は、ダンボールに入ったままの荷物を部屋の片隅に積み重ねて、寝るための空間を作った。電気や水道、ガスはすでに使えるようにはなっていたが、近所のそば屋に行き、夕食を済ませることにした。

翌日の二月二十七日は、朝早くからダンボールに入った荷物を出し整理を始めた。妻が狭い台所を見回して、

「鍋なべやフライパンなどが置ける棚が欲しい」と頼んだ。

「わかった。早速作るよ」

と言うと、私は名古屋から持ってきた中古の自転車に乗り外に出た。何せ、新しい土地である。どこに何を売っているかわからなかったが、自転車に乗ってあちらこちらに回っては探した。

近くのバス通りにある材木店を見つけ、長めの板を買った。材木店からの帰り際に古めかしい金物屋を見つけては、板上から支えるチェーンなどの金具を買い、我が家に戻った。その日は一日中、家の中の片付けに追われた。夕方、妻が近くのスーパーから買ってきた食材で、この家での初めての食事を取った。

始まり

二月の最後の日である。明日から出勤となる。この日は、赤子の次女をベビーカーに乗せて、家族四人で川越の市内を見学することとした。二月にしては天気良く、暖かった。

私は、旅行先の見知らぬ街の風土や歴史を知ることに興味があった。しかし、川越の街を興味本位に知るだけではないかなかった。この地で一生暮らすつもりはなかったが、短くとも何年間はこの土地で家族と共に生活していくためには、どこにどんな店があるのかも知っておかなければならなかった。交差点を渡り、旧市街地の方向へと歩いて行った。市内を流れる小さな新河岸川にかかった「道灌橋」を渡ると、ほどなく「東明寺」が目に入った。この寺は、戦国時代の一五四六（天文十五）年四月に上杉氏と北条氏が戦い、北条氏が勝利したと伝えられている「川越夜戦」場の跡に建てられたと、寺の正門に立てられている案内板にそう書かれていた。その近くに昨日、板を買いに来た材木店があった。

「ここだったのか。わからなかったなあ…」

板を買うことに夢中になっていた私は、この寺の存在には気付かなかった。私達はベビーカーを押しながらゆっくりと旧市街地に入って行った。

旧市街地でまず目にしたのは、重厚な蔵造りの家並みと鐘楼しょうろうであった。蔵造りの家は、一七二〇（享保五）年に幕府の許可で、江戸の町に耐火建築としての蔵造り商家に習い建つようになったと言う。また、鐘楼は約四〇〇年前から城下町川越に時を告げてきた「時の鐘」で、一八九三（明治二十

六)年の川越大火で焼失し、翌年再建されたと言う。現在も時を知らせる鐘の音が響く。

昼近くには、本川越駅から近い「喜多院」と徳川家康の所縁の「東照宮」を見に行く。「喜多院」には徳川三代將軍家光の誕生の間(客殿)、春日局の化粧の間(書院)、五百羅漢などがあり、正月三日には盛大にダルマ市が開かれると言う。境内にはサクラの木が多く植えられていた。

〈春になれば花見に来よう〉

酒好きの私は、サクラの花が満開している頃を想像してそう思った。この境内の売店で、ベビーカーで寝ている赤子を起すことなく、三人で味噌みそを塗ったコンニャクや焼き団子を買ってはほおばった。

家の方向に戻る途中、「氷川神社」に寄る。十月に行われる「川越祭り」は、ここ「氷川神社」の例大祭である。私の家族達は、毎年正月の初詣はつもちぎにこの神社に訪れることとなる。

この他に、太田道真・道灌父子が築城した川越城本丸の跡にある本丸御殿があり、そのそばに市営プールがあった。毎年夏になると、私は幼い時の子供達を連れてはこのプールに行き、帰り際にはプールのそばにある子供向けの売店で「かき氷」や「焼きそば」を食べさせては優しい父親であることに努めた。そのような父親になろうとしたのは、知ることのでき

なかった父親の存在を、父親になった自分が演ずることによって娘達に良い父親の思い出を与えようとする自己満足の表現であった。

街の中を歩き回り、気の入った景観があればカメラで写真を撮りながら、

「医者に、寺か。段取りが良過ぎるなあ…」

人口の割には医院や小規模の病院と寺が多いのには、少々驚いた。

家に戻ると、狭い風呂にゆつたりと首までつかりながら

「人間じんかん、いたるところ青山あり(人間はどこで死んでも骨を埋める場所ぐらいある)」

と、大学の同じ研究室の助手であった松田先生が名古屋を去る私に言った言葉を思い出した。その日は早めに晩酌して、床に就いた。さあ、明日からは生きるために働くサラリーマンである！

サラリーマン人生の始まりの当日が来た。八時半頃に、何度も訪れている総務室に着いた。この日は三月一日で、この会社では月初めの社長朝礼がある日であった。

私は総務課長の谷川に連れられ、二階の玄関側にある広々とした部屋に案内された。すでに五、六十人の社員が、マイ

クが備えられた朝礼台に向かって立ち並んでいた。その中には赤色の腕章を着けた社員が数多くいた。谷川は一人朝礼台の方に向かって歩いて行った。私は立ち並ぶ社員達の最後列に立った。九時の始業のチャイムが鳴り終わるとすぐに、「ただいまより、月初めの社長の挨拶を受けます。社長！よろしく願います」

と、スーツ姿の谷川はマイクを通して第一声を発した。最後列からは姿が見えなかったが、恰幅の良い、頭の毛が少ない白髪混じりの男性が台の上に歩み立った。

「では、今月の受注額は：万円であり、売上額は：万円であった。今年度見込額は利益で：円と推定され、：である」

と、私には何のことかわからない数字が社長から報告されていた。これらの数字報告が一通り終えた後、

「ここで、皆さんに紹介したい人がいます。それは呉さんです。彼は我が社において、最初の博士号を持つ社員となります。第一号の博士です。呉君！こちらに来て、皆さんに社長の挨拶をして下さい」

と、自らマイクを通して声を掛けた。紹介はされるだろうとは予期していたが、マイクを持って台の上で自己紹介をさせられるとは思ってもいなかった。

立ち並ぶ社員達の間を最後列から朝礼台のある方向に早

走りに抜け、台の上に立った。

「先程、社長から紹介がありました呉です！この度、当社に入社することになりました。今までは、大学で自分のための研究生生活を送って来ましたが、これからは、給料をもらう分、会社に貢献しなければと思っております。よろしく願います」

と社長から渡されたマイクを手にして、立ち並ぶ社員達に向かって挨拶をした。社長の冒頭の数字が経営にかかわるお金の話であることが、何となくわかって「給料：」という言葉を使った。この日から、私はこの会社で博士一号だけではなく、外国人第一号でもあった。

朝礼が終わった後、

「呉さんの挨拶は、組合員に良い刺激を与えてくれた」

と、谷川は総務室に戻った私に言った。意味のわからない言葉であった。折しも「春闘」の時期であった。戻ってすぐに、私は社長室に呼ばれ、

「ついに、我社にも博士が来るようになったか！大いに、頑張ってくれたまえ」

と、高木と言う名の社長から博士としての過大な期待が告げられた。

「わかりました！努力してみます」

と答えたものの、「博士であるからと言っても、何でもわかるはずがないよ…」と思いつつ、数分後には社長室を出た。又もや総務室に戻ると、次に四階にある一部署へ、谷川に連れて行かれた。そこで、居合わせた社員と一言言葉を交わしては、谷川は私を残して一人階段を下りて行った。

このときをもつて、約二十年後までは私と谷川との直接の接触がなくなった。と言うのは、総務の人事的な役割はこれまでであり、配属されれば、配属先の長の管理の下で仕事をするようになるからである。また、どう言う訳か？谷川は間もなく大阪に左遷されるからである。

谷川に連れて行かれた部署は、「防災」や「環境」分野についての調査・計画などを、国や地方自治体から受注しては生産している調査部であった。当然、私はこの部に配属されることになっていた。

三月は、年度末に当たるため極めて多忙な時期のようである。この日は部長も課長も不在で、部には数人の社員しかいなかった。私は朝礼で自己紹介をしていたので、部屋にいる数人の社員から自己紹介を受けた。

私の席は、六つの机が二列に向かい合って並ぶセクションの真ん中の一つであった。その席の椅子に腰を掛けてみた。

自己紹介で、五歳年下の某私立大学を出たと言う気の弱そうな福山が右隣の席に座っていた。

「机の上をふいておきました。それに机の引出しの中には筆記道具をそろえて置きましたから」

福山が耳元でそつとささやいた。引出しを開けてみると、鉛筆や消しゴムなどが整理されて入っていた。

福山と同年齢の、地方出身で東京の某私立大学を卒業したと言う左隣席の山本が、

「社長がマイクを持たして挨拶をさせた人は、呉さんが始めてです」

と教えてくれた。

間もなく、昼休みのチャイムが館内に流れた。

「食堂に案内しますよ」

と、椅子から立ち上がった山本は私を食堂に誘った。山本の名は「道元」と言い、その名の通り、小さな寺の坊主の息子であった。

連れられた食堂は、午前中に朝礼で使われていた広々とした部屋であった。朝礼のときには机がなかったが、中に入っていると、折り畳の机が何脚も並べられていた。月一回の社長朝礼はこの食堂で行われるらしい。食堂は四年前の昭和五十年に建てられた建造物であることから、いまだ新しく清潔

感が漂っていた。厨房ちゅうぼうの中で、年配の五、六人の男女が割ぼう着を身に付けて忙しそうに動いていた。私は山本からもらった食券をカウンターの上に置き、順番を待った。

「定食を下さい！」

自分の順番が来たとき、カウンター越しに割ぼう着を身に付けた女性に向かって大きな声で言った。

定食とは、食堂の出入り口の黒板に白墨で書かれている当日のただ一つのメニューのことである。当日のメニューを好まない人は、別に二個のおにぎり付きのうどん又はそばが用意されている。それでも嫌な人は外食である。食事代は一食二百五十円で安かった。当然、会社からの補助があつたのである。残業する社員には予約さえすれば夕食が、独身者や早朝出勤者のためには同じく朝食も用意されていた。私は会社での昼食が楽しみになった。美味しかった。ただ、粘々した納豆が毎回出されるのには閉口した。関西人には納豆を食べる習慣がなかった。その後、経費節減のために食堂が閉鎖されるまで納豆にはしを付けなかった。

渡された定食をアルミ盆の上に載せ、食堂の中ほどの空席に腰を下ろした。割りばしを割り、口の中にご飯を運びょうとした。そのとき、食事を終えていた二十歳前後の数人の女子

社員が、座っている私の席を取り囲んだ。

「呉さん！独身ですか？」

目鼻の整った一人の女子社員が単刀直入に聞いた。一瞬、私のはしの動きが止まった。が、

「結婚しているよ。子供が二人いる」

と、その女子社員の顔を見上げて応えた。

「なーんだ：」

と言いながら、彼女達はすぐに立ち去った。

（ガキども、何を考えているのか。おちよくるな！）

と心の中で怒鳴った。三十一歳の私には、当時「年下の女子社員には興味がなかったが、四十歳に差し掛かる頃、その女子社員を見ては、「仲良くしておけば良かった。ちよつと、もつたいなかったなあ：」と後悔することがあった。

ところで、福山と山本は労働組合の組合員であった。山本は労働組合の幹部で、調査部に所属する調査課の組合活動を仕切っていた。二人の私に対する親切な態度は、組合に入れるためのものであった。

「あのときは、組合員になつてもらいたくて、接近したのだ」

と、後に坊主の息子の山本道元から親切心の本音を聞かされた。元々、学生運動の経験を持つ私は、正社員になれば労働組合に入る気持ちであったのであった。当然、そのときのそ

の場では言わなかったが…。

研修

私が正式に社員として「辞令」を言い渡されるのは、入社した年の一九七九（昭和五十四）年四月一日であるが、昭和五十三度入社として取り扱われた。これは、入社面接時に、「三月までに入社すれば、前年度の入社となり、新年度の四月から給料が上がる」

と、「面接に立ち会った常務取締役の竹田からの配慮からであった。

一般には、入社すると、新入社員は「会社の組織や仕組み」「規則や規定」「営業や技術の内容」などについての講習を数ヶ月にわたって受けなければならない研修期間がある。研修期間が修了した時点で各部署に仮配属される。この結果を持って正社員として正式配属となる。ただし、研修期間に社員としてふさわしくないと会社が判断した場合は採用の取り消しがあるのであるが、このようなケースはまれである。

「こんなことがあったら、俺の家族はどこに帰れと言うのか！」

この話を聞かされて、そう思ったことがあった。

昭和五十四度の入社式が四月一日にある。三月一日入社のはそれまでの一ヶ月間、田中の仕事を手伝うことになった。田中は東京にある某国立大学博士課程を満了したものの、博士号を取得しないまま都内の地質調査会社に就職していたが、この会社に引つ張られて数ヶ月前に途中入社していた。二つ年上の既婚者であった。頭の切れそうな人物に見えた。

田中は、国が直接管理している直轄河川の流出土砂量を計算していた。計算には大学の先生が考え出した流砂量式を用いていた。私の仕事は、田中が計算した上流から下流の重要なポイントでの流出土砂の量が計算式と合っているかをチェックすることであった。実際の河川でこのような計算をした経験がなかったが、計算式については大学院の「ゼミ」で習っていた。

この計算結果をとりまとめた報告書を国に納める時期が迫っていたが、仕事の進み具合から見て、納期である三月末日までには納まる気配が感じられなかった。

「納期内に仕事を収めると言うのは大変なことなのだなあ」

納期が迫って疲れ切った表情をしている田中の姿を見て、私は民間での仕事の現実の厳しさを初めて知った。結果的には、この仕事は納期内に間に合わず、新入社員の研修期間が

終わる六月末まで続いた。

手伝い初めて一カ月後、一九七九（昭和五十四）年度の入社式があった。新入社員は約二十名程度であった。彼らが浪人や留年をせずに、ともに大学を出ておれば、年齢が私とちよほど十歳年下となる。彼らの言葉遣いを聞く限り、新入社員のほとんどが関東以北の出身者で関西人はいないようであった。

この年の新入社員が二十名と言うのは、この会社にとって大量採用であった。これは、一九七六（昭和五十一）年に、オイルショックによる業績低迷で希望退職者を募り多量の退職者を出したが、その後の景気回復に伴う人材・人員不足を補うための会社の対応であった。

オイルショックとは、一九七〇年代に二度あった、原油の供給逼迫^{ひっぼく}および価格高騰と、それに伴う経済混乱のことを指す。石油危機、石油ショックとも称される。

一九七三（昭和四十八）年の第一次オイルショックでは、ペルシア湾岸産油六カ国が原油公示価格を引き上げるとともに原油生産の削減とイスラエル支援国への禁輸を決定したことによって起きた。日本では急速にインフレが加速。戦後続いていた「高度経済成長」がここに終えんを迎えた。この時の社会現象として、流言によるトイレットペーパーや洗剤な

どほとんどの物資の買占め騒動が発生した。大学院生であった私は、大学構内のトイレに入って、

「トイレットペーパーがない。…ない。どこにあるのだ！」と慌てたほど、大学に備えられていたトイレットペーパーがあちらこちらのトイレで盗まれていた。

第二次オイルショックは、一九七八（昭和五十三）年のイラン革命より、イランでの石油生産が中断した。イランから大量の原油を購入していた日本は需給が緊迫した。規模としては、第一次オイルショック並の原油価格の高騰であった。しかし、第一次での学習効果、省エネルギー政策の浸透、企業の合理化効果などにより日本経済は比較的軽微な影響で済むことができた。また第一次の頃ほど値上げは長引かず、イランも石油販売を再開し、数年後には価格下落に転じて危機を免れた。

今年の新入社員と共に、研修を受けるが、私は自分が必要と思う講習のみを受ければ良いと会社から言われていた。田中の仕事の手伝いをしながら、受講科目を選択しては講義を受けた。研修室は四階にあり、部屋の正面には黒板が設置されていると言う、学校の教室と同じ作りであった。研修室では常に最前席に座り、選択した科目の講義を真剣に聞き入っ

ていた。何せ、他の新入社員達とは十歳も年上であり、妻子を食わしていかなければならないと言う使命感があった。

講習が後半の日程に入った。研修室に講師の甲高い声のみが響き、新入社員達はシーンと静まり返っていた。最前席に座っている私は、新入社員達がまじめに講義を聴いているものと思っていたが、余りの静けさに後ろの席を振り返った。

「何だ！静かだなと思ったら、寝ているのか」

新入社員のほとんどが寝ているのである。中には堂々と顔を机の上に伏せて寝入っている者もいた。

（まあ、俺ほど肩に生活がのし掛かっている訳でもなし…）

と思いつながら、講師の方に振り向いた。講師と目が合った。途端、二人は苦笑いを浮かべた。

会社に午前九時前に着き、昼休みを挟んで午後四時まで講義を続け様に受けると言うことは、大学時代には経験がなかったことであろう。その講義が一ヶ月間の中日となると、張り詰めた緊張にも限度があり、耐えられなくなったのである。

講師は寝ている新入社員達を見て起こそうとはしなかった。淡々と講義を進めていた。恐らく、講師も新入社員の間には同じような経験をしていたのである。

その日の講義が終わった後、講師を務めていた三十歳代半

の古株の社員が、

「呉さんから、どんな質問が飛び出すのか、ヒヤヒヤしていた。質問されたら答えられるかどうか不安だった」

と、講義中の心中を言った。

「とんでもない。色々勉強になっていますよ」

と応えた。

「ところで、呉さんは我社の竹田顧問をご存知ですか？」

「名前だけは存じております。『航空写真測量』と言う本の著者ですね」

この会社を初めて訪問したときに手渡された、表紙が薄肌色の本を書いた人物である。会社に入れば、新入社員としては最も歳だから即戦力にならなければと、この本を入社前に読んで勉強していたが、難しくて正直なところほとんど理解できなかつた。

「実は、竹田顧問が呉さんに会いたがっています。毎日、会社には出社されない方なのですが、今日は会社に来ておられます。会ってみますか？」

と、講師を務めていた彼は言った。

「ぜひお願いします。今から会えますか？」

「そのつもりです。竹田顧問は四階の顧問室におられます。

これからお連れします」

彼は私よりも年上であるにもかかわらず、丁寧に受け答えをしていた。彼に連れられて研修室と同じ階の廊下の奥にある顧問室に向かった。

「竹田顧問、失礼します。呉さんをお連れしました！」

と、彼は顧問室のドアを開け、うやうやしくお辞儀して入って行った。私も彼の後に従って顧問室に入った。入るなり、目に止まったのは、こちらに背を向けながら、机に向かつて書き物をしている白髪の老人であった。机のそばには杖つえが置かれていた。老人はこちらの方に振り向き、

「良く来たね。あなたが呉さんですか？一度会ってみたいと思っていました」

「こちらこそ、竹田先生にお会いしたかったです。先生の書かれた本を読ませて頂きましたが、難しくて十分理解できませんでした」

「そうですか、皆さんもそう言うのです。数式ばかりで…」

二人は終始にこやかに言葉を交わしていた。

「ところで、呉さんは、なぜ国籍にこだわるのかね？突っ張っているのですか？」

と、竹田は急に真剣な面持ちで尋ねた。

「そんなことはありませんよ…」

と、私は一言言っただけで話題を変えた。

過去に、このような質問を何度か投げ掛けられたことがあった。その度に、

「痛みを与えた者が受けた者の気持ちを理解することはできない。与えた者は忘れられても、傷を受けたものは決して忘れることができない。痛みをわかる人間とは痛みを受けた人間だけがわかるものである」

と応えてきたが、今となつては「痛み」を論ずることに疲れ、この件については深く立ち入りたくはなかった。

しかし、竹田顧問はそのことを知って質問を投げかけているようであった。以前のような前知識のない質問とはどこか違った、温かい人の思いやりが感じられた。人生経験を長く積み重ねてきた歳のせいからくるものなのか…。

竹田顧問は、明治四十一年佐賀県に生まれた。昭和五年東京帝国大学を卒業後、日本陸軍陸地測量部に入隊し、十年後には陸軍教授となり、旧満州や東南アジアの地形図作成に主導的な役割を果たした。戦後は土木測量の本場オランダに留学、当時では最先端の航空写真測量技術を日本に持ち帰り、日本の航空写真測量をリードしていた。その後、この会社に取り締役として転籍し、会社の創建に大きな貢献を果たした人物であった。面接で会った常務取締役の竹田の実兄であった。

〈戦争と言う時代に生き、日本によって植民地化された異国

の地で人と殺し合う軍人でなく、戦後を生き抜いてきたインテリゲンチヤ（知識階級）には、どこか国籍にこだわらない世界観を持っているのではないか？」

竹田顧問に対して、私なりにそう解釈をした。

長女が小学六年生になった春、私は名古屋の友人アン・ジョンチ（安政治）から投稿を依頼された「科学東海」の在日の機関紙に次のような文面を送っている。

「（便り）小生が名古屋を離れて八年近くが過ぎ去りました。（中略）いずれにしろ、在日二世である小生は、会社で突っ張り過ぎと言われているが、実際には日本人的思考に流されていることが多くなったことに気付きました。小生は何かの機会があれば、在日コリアンとしての立場を再認識してはよい一層突っ張って生きようと心掛けているしだいですが。ただ、小生の子供に対して小生のような突っ張りが必要なのか、または要求すべきものなのか、今のところはっきり言えないでいます…」

第三章 平社員

新米社員

四月一日から、正式社員となった私が所属する調査部は同フロアの海洋部と合併して三つの課からなる「調査・海洋部」となった。調査部の部長であった中山が「調査・海洋部」の部長となり、中山より年上の前海洋部の部長は部付きの技師長となる。

私がいる一課は「防災関連業務」の仕事を受け持つ部署であり、新任課長には同じ団塊世代の同じ歳の水山がなった。彼は東北出身で、高校を卒業すると同時にこの会社に就職し、十年以上は経っていた。結婚はしていなかった。三十歳前半に課長になるのは、この会社では極めて早い出世であった。「環境関連業務」の仕事を受け持つ第二課の課長の柴田もその一人である。彼も同じく団塊世代の昭和二十二年生まれで、東北出身者であった。大学は京都の某国立大学を卒業している。最近、この会社でアルバイトをしていた若い女性と結婚したと言う。

私は、新任課長の水山から、田中の仕事の手伝いと同時に、空中写真を判読する仕事を任される。大学時代で空中写真を

見たの一度だけで、目の前にあるカラー写真でなく白黒の写真であった。

空中写真判読とは、一般に、航空機から撮影したペアの航空写真を立体視して、そこに写っている地形、地質、植生などの情報を判読することを言う。

立体視した経験がなく、立体視するための反射式立体鏡や簡易立体鏡も初めて見る私は、

「俺には、写真に写っているものが本当に立体で見えるのか？」

と、判読以前の問題として不安になった。誰もが立体視できるものではない。特に、乱視の人は立体視ができないのである。反射式立体鏡を通して、恐る恐るペアのカラー写真を見ていた。

「おお！浮かび上がった。まるで飛行機に乗って地上を眺めているようだ！」

と当初の不安はどこやら、地上にそそり立つ緑に覆われた山々や曲線を描く青々とした川の美しさを見て、声を上げて感動した。

この空中写真を判読する仕事は数ヶ月間続くのである。私に与えられた判読は、ある山岳地帯の「崩壊地」と「地すべ

り地」の分布状況を把握するものであった。この間、写真判読に関わる専門書を読んだり、判読経験のある同僚に教を請うたりしては判読と言う技術を習得しながら作業を進めていた。

「何ぼのぞいても浮かばない！浮かんで来ない！」

と夢の中で言っては、私は夜中に目を覚ますことがしばしばあった。一種の職業病と言える。肉眼で立体視できるようになると、

「便器に座って、正面のタイルを見つめていると、急にタイルが前面に大きく浮かび上がって自分に迫って来ることがある」

と語る熟練者がいた。

この仕事をきっかけに、私は急速に判読能力を身に付け、後に究極的な写真判読項目であるフォト・リニアメント（線状構造）を判読することができるようになるのである。

少々、堅苦しい話になるが、フォト・リニアメントとは地形・地質的要素や植生要素などを鍵にして判読するものであり、その線は断層を表現していることが多い。日本中の活断層の存在は空中写真判読と言う技術によって飛躍的に明らかになってきたのである。

入社して、二カ月半が経った五月に、東京の有楽町線永田町駅近くにある砂防会館で「砂防学会」が開催された。「砂防学会」は斜面崩壊、土石流、地すべりなどによる土砂災害の防止・軽減に資するための研究発表会であり、全国規模で年一回行われる学会である。

この日はポカポカした陽気で、久々に大学の同じ研究室の先生や仲間に出会おうのと思うと、大学院生時代から毎年参加している私は浮き浮きした気分になって会場に向かった。到達したのは昼過ぎであった。受付で「研究発表会概要集」を受け取ると、会社役員である黒川の発表が間もなく始まるのを知って、そのままその発表会場に向かった。会場は広く、数百の椅子が備えられていた。階段状になっている最後方列の椅子に腰を下ろした私は、これから発表するであろう黒川の出番を待ちながら、「研究発表会概要集」に目を通していった。「なぜ、連名で発表しないのだろうか？」

およそ三百ページからなる「研究発表会概要集」の中の二ページにまとめられた黒川の発表概要を見て不思議に思えた。発表氏名欄に黒川一人の名前だけが載っていた。

黒川が演壇に現れた。ハンドマイクとスライドを使って、定められた時間のほぼ十五分で無事に発表し終えた。質問は座長からのあたりさわりのない一件があっただけであった。

黒川の発表後、十五分間の休憩時間があった。私が同僚の加藤とロビーで談笑していたところへ、黒川がやって来て、「コーヒでも飲みに行こうか？」

と誘った。二人は、発表を終えたことにほっとした顔つきの黒川に向かつて

「ごちそうになります」

と声をそろえて返答し、会場を抜け出した。加藤は三つ年の東京生まれで、六本木から通勤していた。六本木にある実家では父親が牛乳配達屋を営んでいた。

加藤が東北地方の某国立大学を卒業したのは一九七六（昭和五十一）年で、私が大学を卒業したのは一九七〇（昭和四十五）年であることから、三十歳代で大学を出たことになる。大学に入る前に、長男として家業を手伝っていたために入學するのが遅かったようである。いまだ独身者であった。

加藤は卒業して数年間は都内の某地質調査会社に就職していたが、その会社に嫌気がさした頃、ある新聞の求人欄にこの会社からの募集があったのを見て、応募したと言う。私より一年ほど早く入社していた。その調査会社に某国立大学院出身の田中がいた。

「誰か、地形・地質のわかる大学卒業以上学歴のある人物は知らないか？」

と、黒川に言われて田中を引き抜いてきたのが途中入社した加藤であった。加藤は人当たりの良い、温厚な男のようであった。

発表会場のそばにある喫茶店に、三人は入った。注文したコーヒーをウェイトレスが運んできた。しばらく黙ってコーヒーを飲んでいたが、

「黒川さん、どうして発表氏名を連名にしなかったのですか？その方が会社に『専門技術者が多くいるのだ』とアピールでき、会社にとって得策ではありませんか？」

と、私は自分のコーヒーを飲み終えるなり、黒川に面と向かって言った。

「誰がいるのか！連名で出せるような、そんな奴やつはこの会社にはおらん！」

と、黒川は眼鏡の奥の目をつり上げ、声を荒げて言った。「社員を育てていくのが黒川さんの役目ではありませんか？」

と、負けずに言い返した。黒川は黙ってしまった。その顔には怒りがにじんでいた。この日から、私は黒川から疎まれる存在となるのであるが、黙っていられない性格であったし、サラリーマンとしての辛苦を知らなかったときでもあった。

その日の夕方に催された学会参加者達の懇親会では、大学の同じ研究室の人達には入社後の近況を、知人達にはこの会社に入社したことを、ビールを注ぎ回りながら報告した。その席上、岡田教授から

「明日、中山君の家に呉君と一緒に行くことになっている。彼にはすでに連絡してある」

と、前触れもなく告げられた。

翌日、午前部の研究発表が終わった後、私と岡田教授は砂防会館の最寄り駅である永田町駅に向かった。

「先生、行き先はわかるのですか？」

と、私はためらうことなく足を進める岡田教授に尋ねた。当然、大学が東京大学であったことから都内の地図は多少わかっているとしても、中山の自宅までの道順を知るはずがないと思っていた。

「呉君、大丈夫だよ。大学時代、中山君の住んでいるところで下宿していたから」

と、岡田教授は笑いながら答えた。

「それは、どう言う意味ですか？」

「実は、学生時代に暮らしていた下宿先の夫婦の娘さんが今の中山君の奥さんだよ。今、その場所で家を建てて住んでいる

るはずだ」

「と言うことは、先生は兩人の結婚に何らか関係していたのですか？」

岡田教授は池袋駅に向かう地下鉄の電車の中で自分と中山夫妻の関係を説明し始めた。

「私が大学の関係で東京に来た際、お世話になった下宿先をお礼がてら訪ねたとき、下宿先の夫婦から、『どこかに娘の結婚相手はいないものか？知っていたら紹介して欲しい』と頼まれたのだ」

と言ったあたりで、私は三者の関係が大体飲み込めた。すなわち岡田教授が兩人のキューピット役を演じた訳であったのである。

中山が通勤している駅に着いた。駅前には下町風の商店街があり、その商店街を横切った辺りに大きな家が立ち並んでいた。その一角に中山の自宅があった。最近建て直したようである。玄関を入ると、中山とその奥さんが迎えに立っていた。

「岡田さん、ひさしぶりです」

「先生、本当にごぶさたしております」

と言いながら、中山と奥さんはうやうやしく頭を下げて、岡田教授と私を居間に案内した。居間には数百年の屋久島杉

で作られた大きなテーブルが置かれていた。居間から見える透明ガラス越しの庭先に中山夫婦が以前住んでいたと言う家が見えた。今はアパートとしてその家を他人に貸しているらしい。

テーブルの上に、奥さんが運んできたコーヒとケーキが置かれた。岡田教授が甘党であることを覚えていたようである。コーヒを飲みながら岡田教授と中山は昔話に花を咲かしていた。時折、相づちを求めるかのように私の方に目をやりながら話し合っていた。二人は「さん」と「君」と呼び合う間柄であった。

岡田教授は昭和元年生まれで、静岡出身で、東京大学在学中に中応召され、学徒出陣で海軍に入隊したが、戦地に行かないまますぐに終戦となり、大学に復学したとのこと。

一方、中山は愛知県の進学高校を卒業した後、一浪して大学に入り、大学ではヨット部に所属していた。二人の話から察すると、中山は経済的に余裕のある学生時代を送ってきた。「坊ちゃん育ち」のようである。

庭先から老婆がやって来て、庭先に面したガラス戸を開けながら

「岡田先生！ひさしぶりですね。偉くなられたそうで」と、その老婆は岡田教授に嬉しそうに言った。

「いや、とんでもないです。それよりもお母さん元気そうで。本当にごぶさたしております」

と、岡田教授は軽く一礼しながら挨拶したのである。老婆は中山の妻の母親で、岡田教授が下宿していたときにお世話になった女性のようなのであった。しばらくの間、老婆は岡田教授と談笑した後、

「どうぞ、ごゆっくり」

と言いながら、庭先から去って行った。

老婆の姿が見えなくなった後、私は入社の手続きの際に持ち帰りとなった「身元保証契約書」を岡田教授にそっと手渡した。電車の中で身元保証人について岡田教授にお願いしておいていた。会社の方も身元保証人の二名のうち、一名はできれば岡田教授になってもらいたいとの話があった。岡田教授は、もう一人の保証人を、

「中山君になってもらおう」

と話していた。岡田教授は「身元保証契約書」の紙を中山の前で開き、自分の万年筆で所定の欄に「岡田順」の氏名を記入し、認印を押した。

「さあ！中山君の番だ」

と言って、屋久島杉のテーブルを隔て対座している中山の目の前に、自分の認印を押し終えた書類の紙を差し出した。

このとき、一瞬のためらいとこわばる中山の顔を、私は見逃さなかった。

「どうしたのか？早く書いて上げたら」

と、中山の顔がこわばるのを知ってか知らずか、岡田教授は促した。中山は黙ってペンを走らせた。そして認印を押した。

急に言われた中山としては、最近知ったばかりの、それも日本人でない在日コリアンの私の身元保証人になると言うのは迷惑な話なのであろう…。

岡田教授と中山の話が終わって、居間から玄関に向かって廊下を歩いていると、

「呉君、労働組合には入るなよ！」

と、中山は言った。私は返答しなかったが、(労働者は当然労働組合に入るものだ)と思いながら、玄関を出て行った。

初給料と初恋

四月二十五日は、初の給料日であった。事務の女子社員から午後三時頃に給料袋を手渡された。サラリーマンになって初の給料である。待望の給料袋を開き、中に入っている明細書に目をやった。

「これは何だ！前年度入社としてくれても、こんなに給料が少ないのか」

名古屋ではバイトで月十四万を稼いでいた私は、思わず目が疑った。明細書には総支給額が十二万円と記されていた。前年度は収入がゼロであったため課税がなかった。現金は銀行振込である。

「こんな給料では生活がやっていけないなあ……」

思案に暮れながら定時の午後五時になると退社した。

「今日、給料日だから刺身を買っておいてくれないか？」

と、当日の朝に好物の刺身を食べたいと妻に告げて出勤していた。家の玄関に着くと、

「ただいま……」

と小声で言いながらドアを開け、六畳の和室の間に入って行った。すでに、夕食の用意がされていた。卓上には刺身が置かれていた。そとと妻に給料袋を渡し、寝間着に着替えた。

「お父さん！これ何、こんなに少ないの？一体これで一ヶ月の生活はやっていけるの？」

と、給料袋を開けた妻はあ然とした顔で言った。私は妻がスーパーで買ってきた三点盛りの刺身をつまみにビールを黙って飲んでいたが、妻の言った言葉を聞いて、ふと思ひ出し

た。あの日のことを。妻の姉と二人で会った大阪の喫茶店の出来事を。

「妹さんと名古屋で暮らしたい。お願いします」

二十七歳の大学院生であった私が義姉に言った。

「あなたは妹と結婚してどうして食べていけるの？まだ学生でしょ？収入はどうするの？」

と、義姉は不安げに尋ねた。

「今、月八万円を稼いでいます」

「それで、やっていけるの？」

「バイトの数を増やします」

後に、義姉が「ベルトの締め付けでズボンの腰周りをしわにしたあなたの夫が頑張って稼ぐと懸命に言っていたよ」と妻に言っていたらしい。義姉の夫は自動車修理工で若くして独立し、妻子を養っていた。

ここで、妻の出会いと結婚に至るまでの出来事について少し語っておこう。

私と妻は同じ高校の同学年で、一年生のときに始めて出会った。その場所は学校の図書室であった。中間テストが近づいた日、遅刻をして一時間目の授業に間に合わなかった私は、教室には入らずに図書室で自習していた。そこに、二人の女

子学生が同じように遅刻をして図書室に入って来た。二人は私が座っている席とはかなり離れた長机の席に向い合っており、カバンから取り出した教科書を開いていた。私は黙ってテストの準備のためにノートに鉛筆を走らせていた。しばらくして、

「すみませんが、この問題の答えがわかりますか？」

と、一人の女子学生がつかつかと近づいて来て、教科書に書かれている問題集を見せて尋ねた。その女子学生は髪が短めで、鼻筋の通った彫りの深い顔だった。

〈美人だなあ！〉

と、一瞬思った。急に胸がドキドキするのを感じた。差し出された問題を見ながらしばらく考え込んでいたが、

「うーん、俺にもわからんわ」

と、申し訳なそうに答えた。

「そう…」

と言うと、彼女は元の席に戻って行った。

〈スタイルの良い女性だなあ〉

その後ろ姿にしばらく見とれていた。彼女の背丈は百六十センチ以上あった。当時の女性としては大きかった。

彼女は私と同じ鶴橋駅から学校に通っている。彼女を知っていたから、朝の鶴橋駅で彼女と会うのが楽しみになっていた。

いつの間にか彼女に恋をしていた。初恋である。彼女は近鉄線の改札口から環状線のプラットホームにいつもやって来る。私は環状線の改札口からプラットホームに上がる。彼女が来る時刻を見計らっては、彼女と偶然出会ったかのように、「ひさしぶり」

と、声を掛ければ、

「昨日、会ったはずよ」

と言われ、

「そうだったかなあ」

と言えば、

「とぼけて」

と言った挨拶を交わしていた。

私はそれ以上の会話を彼女とはしなかった。したくても何話したら良いかわからなかった。年頃の女性と二人で話し合った経験がなかった。男兄弟だけで育ったせいかもしれない。

「好きだ！」と、彼女に初めて言ったのは高校三年生のときである。彼女の女友達の父親が経営する薬局店のオープンセレモニーの手伝いにバイトで雇われたときである。バイト料は食事三食付きで日給千円であった。同じ高校から彼女を

含む男女合わせ九名が寝屋川市にある薬局店に早朝出掛けた。私の仕事は来客者に配るための宣伝用の風船を一日中膨らますことであつた。仕事が終わつて帰りしな、

「コーヒーでも飲んで帰らんか？」

と、その日のバイト料を手にした私は同じ方向に帰る彼女を喫茶店に誘つた。

「ちよつとだけなら、良いわよ」

と、彼女は答えた。二人は鶴橋駅を降りると、駅のすぐそばの喫茶店「ふるさと」に入った。

「家はどこや？」

「駅から歩いて十分ぐらいのところ」

「誰と住んでいるのや？」

家族の話を知ると、急に黙り込んだ。

「何で、黙っているのや」

「何で、そこまで言わなければいけないのよ！」

彼女は自分のことを根掘り葉掘り聞く私に怒つた。少しの間沈黙が続いた。

「…それは、おまえが好きやから」

と、うつむきながら言つた。

実は、彼女が高校一年生のとき、母親が亡くなり、父親や兄弟と別れて、一人叔母おばの家に預けられていた。この日の出

来事を、私は高校一年生から大学四年生になるまでほぼ毎日書きつづつていた大学ノートの日記帳に、「この日は、俺の青春で、人生初めて『好き』と言つた日だ！」と記している。

大学二年生の冬休み、地方の大学から大阪に帰省した私は来春短大を卒業する彼女と会つた。二人は鶴橋駅の近くにありる屋台の「関東煮き（関西ではおでんのことをこう呼ぶ）屋」で、木でできた長椅子に隣り合つて座つた。

「卒業したら、どうするねん？」

「まだ、決めていない…」

「そうか、結婚することもあるのか？」

「それも、わからない…」

二人は皿に盛られたおでんを食べながら、店主がグラスに注いだ温かい酒を飲んでいた。

「できれば、俺が卒業するまで結婚は待つてくれんか？」

と、酒の力を借りて言つた。

「それは、無理だと思ふ」

と、彼女は静かに答えた。

「どうしてや？」

「…」

「そうか、わかつた。では握手をして別れよう！」

急に、私は椅子から立ち上がった。決別の言葉を口に出した。同じように立ち上がった彼女に向かって手を差し出した。二人は握手をして、その店を出て別々の方向の道を歩いて行った。

私は実家に向かって一人夜道を歩いてきた。歩いているうちに、なぜか涙が出てきた。夜空を見上げた。坂本九が歌う「上を向いて歩こう」の歌詞が浮んだ。それを口ずさんだ。「上を向いて歩こう 涙がこぼれないように 泣きながら歩く…」

が、涙はこぼれ落ちた…。

この日の出来事については、十三冊からなる日記帳には記されていないかった。書くのがあまりにも切なかつたのだろう。

それから六年以上が経った。彼女と再会することになる。大学院四年生（博士課程二年）のときである。初夏の京都での学会に参加した。学会が終わった後、大阪に立ち寄った。鶴橋駅に降り、実家に向かう途中、喫茶店「ふるさと」の前を通った。懐かしかった。

「アイスコーヒでも飲んで行くか」

入った店の中は満席であった。が、一人の女性が何か飲み

終えて立ち上がるうとしていた。私はその女性の背後から声を掛けた。

「その席は空きますか？」

「大丈夫です。私は出て行きますので」

立ち上がって返事した女性は振り向いた。

「いやあ！ひさしぶりね！」

と、その女性は私の顔を見るなり言った。別れた彼女であった。

「こんなところで、会うなんて奇遇ね！」

「俺も驚いた」

「何年ぶりかしら？」

偶然出会った彼女は私が六年前と違って何となく大人になっっているのを感じながら、一度立ち上がった席に座り直した。私は同じ席に向い合って座った。

「本当に、ひさしぶりね。元気にしていた？今、どこにいるの？」

「名古屋にいる」

「今、何しているの？」

「名古屋の大学にいる」

「そっちの方は元気にやっている？」

二人は、懐かしい喫茶店「ふるさと」でお互いに近況を語

り合った。それは六年前の付き合い合っていた頃にタイムスリップしたかのようであった。

「ところで、結婚しているのか？」

聞くだけやぼだと思つたが、意を決して尋ねた。

「まだ一人なの」

と、彼女は答えた。その言葉に、いまだ一人でいるはずがないと思つていた私の心が躍つた。

「明日、時間があるか？あるなら、また会いたい」

「昼間なら、大丈夫」

私は彼女とのデートの約束を取り付けて別れた。実家に着くと、

「昔、付き合っていた彼女に偶然会つたよ。明日、また会うことになった」

と、嬉しそうに母親に告げた。

「それは、良かった」

母親は、六年前に彼女に振られて、涙をこぼしながら帰ってきた私を慰めたことを覚えていた。

「会つても、すぐに好きなど、決して言つてはいけないよ。

今は一体どうしているのか、良く聞いてから、判断するのだよ」

と言いながら、夏服の上着を持っていなかった私のために、

直ぐ上の兄が着ていた夏服にアイロンを掛けた。

翌日、彼女とデートした。大阪の二大繁華街の「難波」に行き、映画を見ては食事をした。別れ際の交差点で信号待ちをしていたとき、

「俺と共に、人生を生きて行かないか？」

と、横に立つ彼女に顔を向けないで、信号を見つめながら言った。これが私のプロポーズの言葉であった。母親はこの日にプロポーズするのではないかと予期していたが、そのとおりになった。先に、交差点を渡り終えた彼女は振り返り、私のほおにキスをした。二人は名古屋で結婚式を挙げ、彼女は妻となった。

その妻から「この給料で生活はやっていけるの？」と言われた私は、借家で塾を開くことにした。しかし、手持ちの金はなかった。仕方がなく、京都にいる直ぐ上の兄に電話を掛けた。その兄は長兄と一緒に大学の、稲の研究をしている研究生であった。兄の妻は実の姉の夫が経営している薬局に勤めていた。決して生活は楽ではなかったが、運転資金として十万円を貸してくれた。兄弟からの初めての借金であった。旧市街の中心地であった「札の辻」の交差点付近に蔵造り資料館があり、その隣に小さな印刷所がある。自転車に乗り、

その印刷所で新聞折り込みのための広告の作成と印刷を頼んだ。出来上がった数百枚の片面の広告を市役所の近くにある新聞販売店に持ち込んだ。広告には

《中学生の塾生募集！週二回。教師…農学博士・十一年間の塾師の経験有り。科目…国語、数学、英語》

と書かれていた。広告を見て、やって来たのは中学二年生の女の子と一年生の男の子の二人だけであった。そのうち、口コミで生徒が七、八人集まって来た。教室は二階のふすまを外した四畳半の間である。ベニヤ板の上に模造紙を何枚も重ねて貼ったものを黒板に見立て、マジックを白墨代わりにした。

二階で教えている間、妻は一階の六畳の間で娘二人とテレビを見ていたり、下の娘に母乳を与えたりしていた。時折、三歳になる上の娘が二階に上がって来ては、授業の様子を眺めていた。

「まあ、可愛い！」

と、その娘の顔を見て女子生徒達は声を上げたことが何度かあった。塾で家賃分は稼げた。しかし、会社の仕事が忙しくなったのと、残業代が増えたことから塾は一年間で止めた。直ぐ上の兄から運転資金として借りた十万円はすぐに返せた。

「返ってくるとは思っていなかったのに」

と、直ぐ上の兄の妻が言った。兄弟間では金の貸し借りはほとんどなかった。ゆえに、兄弟同士が金の貸し借りでもめることはなかった。

労働組合員

新年度の五月、机に向かって仕事をしている私の席に、黒縁の眼鏡を掛けた男がにこやかな顔で歩み寄って来た。

「呉さんですか？初めまして。小池です」

と、その男は机の脇に立って言った。

「ああ、そうですか。呉です」

と、椅子から立ち上がって受け答えた。

「どうですか？この会社は…」

「…どう言う意味ですか？」

一瞬、どう答えたら良いのか、私は返答に困った。

「いや、この会社の雰囲気ですよ。働く者にとって良い環境にあるかどうかと言うことですよ」

小池はニコニコしながらそう言った。

「ああ、そう言う意味ですか？まだ入ったばかりで、余りわからないのですが。しかし、この会社の労働組合は強いようですね」

「そうですか。実は、私はこの会社の組合の副委員長をしているのです」

「それは、素晴らしいことです」

学生時代にリーダーに参加したことのある私は労働組合に対して好意的な態度で言った。その態度を見た小池は、世間話を交えながらこの会社の組合について「立て板に水のごとく」とうとうと喋り始めた。

「良く喋る男だなあー」

と思いながら、小池の話を聞いていた。小池は同じ歳で、先月までは営業を担当していた。そしてこの四月から私と同じ部の第二課に係長として配属された。ただ、後任者への営業の引き継ぎがあつてすぐには動けなかった。

小池の一方的な話が終わるのを見計らつて、「組合委員長に会わせて頂きますか？」

と、小池に頼んだ。

それから数日後、小池からの連絡を受けた組合委員長がやつて来た。二人だけで四階にある狭いポンド室に入った。そこには誰もいなかった。接着剤の臭いがした。

「組合委員長をしている金田です」

「私は呉と言います」

「小池さんから聞いております」

二人は簡単な挨拶を交わした後、

「ところで、金田さん、私は組合に入ろうと思つています。

ただ、外国人なので内政干渉になるような政治闘争にはタッチしたくはありません。あくまで、この会社での労働者の権利を守る運動だけに参加したいのですが」

自分の立場を金田に説明し、組合員になることを申し出た。「それで結構です」

と、金田は応えた。金田は三歳ほど年上で、以前は調査課に所属していた。

席に戻る途中、部長である中山の家に岡田教授と一緒に訪ねたときの帰り際に、中山から「呉君、労働組合に入るなよ！」と言われたことを思い出していた。

この年の六月頃、組合の総会が開かれ、小池が金田に代わつて組合の委員長になった。この会社では係長は管理職ではなかった。小池が委員長になった頃から、組合闘争は過激なものとなつて行つた。

この年の春闘は長引いた。労働組合と会社との賃上げ交渉は妥結していなかった。夏になつても春闘が続いていた。闘争が長引くにつれ、労働組合の闘争戦術は多様になり、また巧妙にもなつて行つた。当初は、労働者の有する基本的権利

であるストライキ権をもって「残業拒否」や「一日の職場放棄」を行っていたが、「ステッカー闘争」や「送受電拒否闘争」などの嫌がらせと見えるような行動へと発展して行った。

「ステッカー闘争」とは、要求項目が書かれた紙片の裏のりを付け、それを会社の壁やガラス窓の至るところにベタと貼り付けるものである。管理職はバケツを持っては、赤色の腕章を腕に巻いた社員によって貼られたステッカーを剥がすのであるが、そのステッカーは大変な枚数であった。障子を張り替えるようなりでは簡単に剥がされるとわかった組合の執行部は、合成接着剤をのり代わりに使い始めた。

中山は部内に貼られたステッカーを会社に来ては、毎日率先して剥がしていた。彼の仕事は一日中ステッカー剥がしのようである。これは、同じようなことをいつまでも繰り返すだけの戦術で、まさに決着がつかない「いたちごっこ」であった。私は組合員であつてもステッカーを貼ることを好まなかつたし、参加しなかつた。

「送受電拒否闘争」とは、外部から掛かってくる電話を受けない。また、内部から外部に電話を掛けないと言う戦術である。納期が迫っている物件を担当している者には困つたことであつた。携帯電話やパソコンなどはなかつた時代である。客先に指示を仰ぐとしても電話をすることはできない。客

先が指示を出そうとしても組合員の担当者は電話に出てこない。仕事はスムーズに運ぶはずがない。

「電話を掛けても、担当者は出ない！一体、どうなっているのか！」

と、電話を取った管理職に客先は怒りをぶちまけることもあつた。

入社して間もない私には電話が掛かってくることはほとんどなかつたが、客先と直接連絡し合つて仕事を進めている年配の組合員は、しゃしゃとした顔で客先と電話で話し合っている非組合員を恨めしく見ていた。技術者の誰もが自分の仕事については客先とトラブルを起こしたくないものである。この「送受電拒否闘争」の中、私はショックな出来事を目撃するのである。小池の机の上にある電話が鳴つた。

「小池席ですが。今、席を外していますので、ご用件があれば、お伝えしますが？」

と、管理職が電話に出た。しばらくして、電話を切つた。「小池さん、…さんから電話があつて、折り返し電話して欲しいと言つていた」

その管理職は、電話を取らないで席に座っていた小池にそう告げた。

「わかりました」

と言うと、小池は席を離れて部屋から出て行った。それを追うように中山も出て行った。同じように、私はトイレに行くために部屋から出た。

「呉君、ちよつと！」

トイレから部屋に戻る途中の私に中山が声を掛けた。四階のトイレの近くにある八畳ぐらいの広さの部屋に呼び入れた。その部屋は協力会社の人達が数人使っている部屋であった。中に入るや否や、私の目に映ったのは机の上に置かれた協力会社専用の電話で話をしている小池の姿だった。

「こんなことが許されるのか！組合委員長がスト破りをするなんて―」

組合委員長である小池が「送受電拒否闘争」の指示・決定をしながら、自分の都合で自ら裏切りをするとは思っても寄らなかった。

「組合委員長と言えどこのようなものだ」

と言わんばかりの素振り、中山は私に目をやった。

「良くやるなあ、小池と言う男は！組合員がこれを知ったら、どう思う？それに、俺に「組合に入るな」と言った中山はどんな神経の持ち主だ―」

薄笑いを浮かべている中山の顔を見つめながら心の中でつぶやいた。組合に入って間もない私はこのことについて誰

にも話さなかった。

秋なのに、春闘は続いた。ストライキの日、会社の玄関前に組合員が全員集まった。他の同業会社からの労働組合の執行委員による連帯のメッセージの紹介と挨拶があった後、この会社の執行委員が大きな声で抗議声明文を読み上げた。読み終えると、シュプレヒコールを上げては、会社の周辺の住民に理解と支援を訴えると言う名目のもとでデモ行進に移った。どこかの政党団体に指示されて、動いているような感じがかった。

この会社の組合運動に嫌気を差し始めていた私は、シュプレヒコールでは軽く拳こぶしを上げていたが、デモ行進に移ると、エスケープ（脱走）して数人の古株連中と喫茶店に行つてはコーヒを飲んでいた。

何回目かのストライキの日、喫茶店でコーヒを飲みながら、初出勤のときの、立ち並ぶ社員の前で話した「大学で自分のための研究生活を送って来ましたが、これからは、給料をもらう分、会社に貢献しなければと思っております」と言った私に対して、「呉さんの挨拶は、組合員に良い刺激を与えてくれた」と総務課長の谷川が言った言葉を思い出しては、会社側の気持ちが少々わかるような気がした。

へしかし、このままでは労働組合と会社が共倒れするのではないか？組合のやっている行動は大学紛争の延長ようなもので、時代遅れも甚だしいなあ……」

大学紛争の始まりと終わりを目の当たりにして、時代の流れを感じ取っていた私は、遠くに聞こえるデモ隊の声を聞きながらそう思った。

大学紛争は、一九六九（昭和四十四）年に、東大の象徴である安田講堂を学生達が占拠したのが始まりで、一九七二（昭和四十七）年の過激組織の連合赤軍メンバー五人が群馬県軽井沢町にある保養所「あさま山荘」に人質をとって立てこもり、警察隊と銃撃戦となった「浅間山荘事件」でほぼ終わっていた。私が大学生の後半と大学院生の前半の時代に当たる。組合が言う、春闘が妥結しないまでは受け取らないと拒否していた「夏のボーナス」がやっと「冬のボーナス」前に入った。良かった。やっと入ったのね」

と、妻は初めて見るボーナス袋を握りしめて嬉しそうに言った。

喧嘩

入社して半年が経った頃、竹田顧問を囲んで海洋課の課長の阿久津、第二課課長の柴田、第一課の新田と他部の解析課長の山田など、私を含め数名が会社のすぐそばにある居酒屋「大吉」で酒を交わしていた。阿久津、新田と山田は私より三歳ほど年上の同期生であった。

竹田顧問はゆっくりしたペースで酒を飲み、穏やかな口調で航測技術の話や経験談を語っていた。最初の頃は、皆は竹田顧問の話に耳を傾けながら飲み食いしていた。

ところが、アルコールが入るにつれ、次第にガヤガヤと騒がしくなってきた。めいめいが勝手に話し始めていた。中には大きな声で言い争う者もいた。もはや、竹田顧問の話にまじめに耳を傾ける者はいなかった。この空気を察してか、「私は歳だから、この辺で中座させてもらおうよ」

と言って、竹田顧問は居酒屋から出て行った。竹田顧問が去った後、何に腹を立ったのか、柴田がテーブルの上を「ドン、ドン」とげんこつでたたき始めた。柴田は実に酒癖が悪い男だった。酒の席で、この男に殴られた部下は何人もいた。

「俺の言うことが、わからんのか！」

と怒鳴っては、またテーブルの上をたたいていた。相手は

阿久津であった。阿久津は一メートル八十五センチ以上の背丈があるがっしりした体格の持ち主である。手の大きさも普通でなかった。この男に殴られたらひとたまりもないと、誰もが思う大男であった。海の仕事で鍛えられていた。阿久津も酒癖が悪かった。仕事先の旅館での夜、酒を飲むと、

「愛のムチだ！」
と言つては、日本酒の空ビンで新入社員の頭をたたくことがあった。たたかれた部下は夜になるとヘルメットをかぶつて寝ていたと言う。

私にはこの二人が今にも殴り合いの喧嘩をするのではないかと思えた。

「やるなら、腕相撲で勝負をしるよ！」

と、アルコールのせいで少々気が大きくなっていた私が二人に怒鳴つた。

「何を偉そうに！」

と言うなり、阿久津は私のほおを平手で殴つた。

「この野郎！何をさらすんや！」

頭にきて大阪弁で怒鳴つた。

「やる気か！」

阿久津は身構えた。

「殴り合いは止めよう。腕相撲で決めようや！最初は俺と勝

負や！」

と言いながら、私は隣の空いているテーブルの上にひじをつき、腕相撲の構えをした。

「おお、やつたろうや！」

阿久津もひじをついた。

「まずは、左手から始めようや！」

と、私は言った。二人は手の平を握り合つた。新田が握り合つた二人の手を両者の真ん中の位置に据えた。

「いくぞ！」

と、二人は声を掛け合つて、満身の力を出した。あつと言う間に、私は阿久津の腕を倒し、押し伏せた。一瞬、阿久津の顔が青くなった。

「次は、右手でやろう！」

今度は、阿久津に右手を出すように促した。私は左利きである。かつて左手の腕相撲は負けたことはなかった。腕力が強いのは、成長期の中学生時代に剣道をしていたことや、高校時代に肉体労働のバイトをしていたからであろう。

二人は右の手の平を握り合つた。もはや、阿久津は戦意を喪失していた。以外にあっさりと右腕も勝つた。この勝負は私の先制攻撃による作戦勝ちであった。

「次は、俺の番だ！」

と、この勝負の様子を見ていた柴田が私に向かって右の手の平を出してきた。柴田は強かった。彼の攻撃をしばらく持ちこたえたが、結局は負けてしまった。次に左手で腕相撲をした。文句なしに私の圧勝であった。

柴田は腕力もあり、喧嘩っぽい男であった。学生時代は過激な学生運動の活動家であった。彼は読書家で幅広い知識を持っていた。彼の喋り方は論理的のようでもあり、説得力もあつた。しかし、これはしらふのときであつて、酒でべろんべろんに酔うと、自己中心の一方的な論理となり、自己の意見を相手に押し付ける傾向が大であつた。

「学生運動を経験した連中の中には、このような奴やつが結構いる」

と、同じように学生運動を経験してきた私は知っていたが、自分の周辺に暴力まで振るう人間は珍しかった。柴田は一次会では暴れなかったが、日本酒を飲んだ二次会の場がひどかった。柴田が部下に対して

「二次会に行くぞ！」

と言うものならば、皆は先を争うように終わる寸前の一次会から急いで逃げ出したものだった。逃げ遅れた者は捕まつて二次会に連れて行かれるが、

「ちよつと、すみません。トイレに行きたいので」

と言つては、連れて行かれる途中の路上で、狭いビル間の暗やみに身を隠している彼の部下を、私は何度か目撃していた。二次会で暴力ざたを起こして、出入りを禁じられる店もあつた。

（もう、殴り合いの喧嘩は起こらないだろう）

と思つて、私は皆よりも先に「大吉」を出た。

翌朝、会社に出勤すると、

「呉君、山ちゃん（山田）が自宅に帰つて来ていないと、山ちゃんの奥さんから今朝電話があつたのだが、どこにいるか知らないか？」

と、部長の中山が尋ねた。

「どうしたんですか？」

「呉君が来る前に、新田君に聞いたところ、新田は『大吉で、阿久津と山ちゃんが殴り合いをして、ケガを負つた山ちゃんを自分が病院に車で連れて行ったが、どの病院に連れて行ったのか覚えていない。呉さんに聞けばわかるかもしれない。呉さんは酔つ払つていなかったから』と言うのだが……」

「知りませんよ。あんなおとなしい山田さんが、阿久津さんと殴り合いをしたのですか？」

「今日休んでいる阿久津にも、家に電話して聞いたのだが、

『覚えていない』と言うのだ」

「柴田さんには、聞かなかったのですか？」

「彼の姿も見当たらないのだ」

もはや、喧嘩はしないものと思っていたが、山田と阿久津が殴り合いの喧嘩をするとは信じられなかった。柴田と阿久津なら納得することもできた。その日の午後、

「呉君、山ちゃんの奥さんから電話があつて、本人から『埼玉病院に入院している』と連絡が入つたと言ふことだ。早速、病院に行つてくる」

と言つて、すぐに中山は会社の車を乗つて病院に向かつた。酔つ払つた新田は会社の近くの病院に山田を連れて行つていたのである。

「自分の車を運転して、良く連れて行けたものだな……」

と驚いた。会社に戻つて来た中山は、

「山ちゃんは、ろつ骨を折っていた。一ヶ月以上の入院は必要とのことだ。奥さんも来ていた」

と、この事件の關係者に告げた。

午後過ぎに、柴田がどこから来たのか、自分の席に座つていた。

「呉さん、聞いたよ！阿久津さんが殴つて山田さんのろつ骨を折つたつて？私の手ははれていなくて良かったよ」

と、ほっとした顔をして言つた。

「どこに、いたんですか？」

「呉さんが帰つた後、私は会社に戻つてすぐに寝たよ。目を覚ますと、履いていた靴は左右別々の他人の靴だった」

柴田は会社の四階にある宿泊のための和室の部屋で午前中まで寝ていたのであつた。

〈この男が喧嘩の最大の原因を作つたのに――〉

と思うと、腹立たしかつた。

この出来事は、会社の懲罰委員会にかかり、阿久津は課長の職務から外された。一方、数十名の部下を持つていた山田は二ヶ月後に退院し、会社に戻つて来たが、課長としてのさい配を振るう場はもはやなかつた。彼の不在中に、後輩が課長代理の職務に就き、部下に対してさい配を振るつていた。その後、山田は管理部門に回された。柴田は処罰を受けなかつた。

〈殴り合いの喧嘩は、勝つても無傷ではられない。喧嘩すれば両方が何らかの傷を負うものだ〉

私は長年の喧嘩経験からこのことを知つていた。

私が生まれ、高校時代まで過ごした朝鮮人長屋は、梁石日（ヤン・ソギル）の小説「血と骨」の世界に出てくるように、

大人達が大声でののしり合いながら殴り合いの喧嘩をしようと
言うのは日常茶飯事であった。少年の頃、包丁で頭を切られ、
血を流していた大人を見たことがあった。また、喧嘩の仲裁
に入った警官のピストルを腰から抜こうとした大人が警官に
腕をつかまれ、一本背負いで見事に投げ飛ばされて気を失っ
たのを目撃した。数えれば切りがない。そのような環境で育
った私も、殴り合いの喧嘩を良くした。

初めて本格的な殴り合いの喧嘩をしたのは、小学六年生の
夏休みときであった。隣の学校区にあるプールに六人で出
掛けた。当時、近場でプールのある学校はこの小学校だけで、
私の通う学校にはなかった。夏休みは周辺の子供達にも開放
していた。プールの広さは縦二十五メートル、横十メートル
であった。

脱衣場は男の子と女の子とに分かれた二つの教室であっ
た。教室は机や椅子が隅に二段から三段ぐらいに積み上げら
れ、真ん中がコルターで塗られた板の床で、踊り場のよ
うになっていた。男子専用の教室で水着に着替え、プールへ
と行った。プールに着くと、先にプールに入っていた仲間の
一つ年上の男がいじめられているが見えた。その男は低学年
の小学生ぐらいの背丈しかなかった。いじめている男は真っ
黒く日焼けした丸坊主の太った男だった。背丈は私と同じく

らいであった。

「止めたれや！」

二人がいるそばに泳いで行って、相手の男に怒鳴った。

「何！生意気な。小学生のくせにして」

と相手の男が言いながら、殴りかかろうとした。

「やるなら、プールから出てからしようや！」

と言って、いじめるのを止めたその男から離れ、

「あいつは誰や。知ってる奴か？」

と、いじめられていた仲間の男に尋ねた。

「あいつは、同じクラスの中学一年生で、いつも俺をいじめ
よるねん！」

仲間の男は目に涙をためながら答えた。

脱衣所になった教室に戻ると、そこには先程の日焼けした
中学一年生が普段着に着替えて私を待っていた。

「ちよつと待ってくれや。先に着替えさしてくれ」

海水パンツを脱ぎ、ランニングシャツと半ズボンに着替え
後、その男の方に目をやった。その男の後ろには、私よりは
はるかに背丈の高い男二人が中学校の帽子をかぶり、帽子の
縁に指をあてながらニヤニヤして立っていた。二人は中学三
年生であった。

「こいつか、生意気な小学生は！」

「そうやね、こいつや！」

「わかった。ここで二人勝負しろ！」

二人のうちの兄貴分らしい男が私と中学一年生の男に差し（一対一）の喧嘩を命令した。その言葉に促されて、二人は踊り場のような教室の真ん中で殴り合いを始めた。

（勝っても、ただで済まんなあ…）

と、殴り合いながら心の中で思った。しばらくすると、「もう良いだろう！おまえ、こっちに来い！」

と、私は中学三年生の二人の前に呼び立たされた。途端、「この野郎、生意気な！」

と言うなり、喧嘩を命じた中学生が私の両方のほおを平手で数発殴った。すると、もう一方の中学生が顔をげんこつで殴った。この一発で目の周りは青黒いあざとなった。中学一年生の男も加わり、三人は順番に殴り続けた。黙って殴られていた。小学六年生としては体格が良く、背も高かった。クラスでは三番ぐらいの背丈であったが、大人のような体格をした中学三年生では勝ち目がなかった。

殴られている私を、仲間は教室の片隅で震えながら見つめていたが、仲間の一人の姿が消えていた。私が殴れている間に、教室から逃げ出していた。三人は殴ることに夢中で、そのことには気付かなかった。

リンチは終わろうとしたときである。教室の扉が大きく開けられ、直ぐ上の中学三年生の兄が教室に飛び込んで来た。

「誰だ！俺の弟を殴っていた奴はやっ！」

と、すさまじい形相で怒鳴った。教室から逃げ出していた仲間の一人が知らせたのである。

「えっ、呉の弟だったのか！」

中学三年生の二人は教室に入ってから来た直ぐ上の兄の顔を見て驚いた。

「おまえらか！こっちに来い。良くも、俺の弟をこんな目にあわせたなあ！」

兄は弟の顔を見て、怒りをあらわにした。

「呉の弟とは知らなかった！」

中学三年生の二人は兄を恐れているようであった。

「テブン！この三人を思い切り殴れ！」

と、兄ははれ上がった顔と目の周りが青黒くなった私に言った。

「もう良いよ…」

ダメージを食らっている私はもはや殴り返す気力もなかった。

「そうか、わかった。俺が代わりに殴ってやる」

と言うなり、兄はげんこつで三人をめちゃくちゃに殴った。

三人は立ったまま殴られていた。これでリンチの仕返しは終わった。兄は私を教室の外にある水道のところに連れて行った。

「なぜ、あの中学三年生二人が兄に手を出さないでいたのか？」

水道の水で顔を冷やしながらか不思議に思った。そのことを、急いで乗って来た自転車歩きながら引く兄に尋ねた。

「うん、実は二年生のときに喧嘩して、あの二人のうちの兄貴分みたいな男の腕の骨を折ってしまっただけ。あの後、手術代を出したオモニ（母）にめちゃくちゃ怒られたよ」

「それで、恐くて手を出さなかったのか！」

兄の話で納得できた。プールから家に帰る途中に散髪屋がある。その店に差し掛かったとき、

「ここで、待つとれ！」

と兄が言うと、自転車に乗って家の方向に走って行った。しばらくして、生卵を一つ持って戻って来た。

「このまま帰ると、『また喧嘩をしたのか！』とオモニに怒られるぞ！生卵の殻ははれた皮膚に効くらしい」

と言いながら、直ぐ上の兄は散髪屋の横の路地に私を連れて行き、青黒くなった右目の周りに卵を当てた。

「兄もやるなあ！」

と、卵を目の周りに当てながら思った。

中学一年生のときである。中学校はプールのある小学校の隣にあった。その中学校には三つの小学校からの生徒達が入学していた。そしてその三つの小学校の間で、暴力による子供の権力闘争があった。学校で幅を利かしていたのはプールのある小学校から来た生徒達であった。

中学校に入学して間もない頃、私は教室でプールのある小学校から入学してきた富永と殴り合いの喧嘩になった。私のげんこつが富永の顔面をとらえた。その衝撃で富永は後ろへ倒れ、後頭部を机の角にぶつけた。

「大変や！血が出ている」

「保健室に連れて行こう」

富永の後頭部から血が出ていた。殴り合いを見ていた男子生徒が富永を起こし、保健室に連れて行った。

授業開始のチャイムが鳴って、数学の先生が教室に入って来た。床に付いている血痕を見た先生が、

「一体どうしたんや！」

と、興奮冷めやらないで突っ立っている生徒達に尋ねた。

「呉さんと富永さんが喧嘩をしていたんです！」

と、興奮気味に女子生徒が黒板の前に立っている先生に告げた。

「富永はどこにいるんや？」

「保健室に行きました」

「そうか、呉！前に出て来い！」

先生の前に出た私は、皆の前で往復ビンタを食らわされた。

休憩時間に富永は頭に白い包帯を巻いて教室に戻って来た。

「富永さん、何ともなかった？大丈夫？」

と、席に座った富永を囲み、女子生徒達は心配そうに尋ねた。

「ちょっと、切れただけや。保健室の先生は『大丈夫や』と言っていた」

と、嬉しそうな顔をして答えていた。

〈女の子に囲まれて、そんなに嬉しいのか！〉

バツが悪くなって席で黙って座っていた私はそれを聞いて心の中でつぶやいた。

その日は、教室の掃除当番であった。

「校門に富永の先輩達が、呉が出て来るのを待ち構えているぞ！」

と言いながら、同じ小学校出身の同級生が教室に駆け込んできた。二階の教室の窓から校門の方を見ると、富永と四、五人の中学二、三年生が下校する生徒達を食い入るように見つめていた。

「やばいな……。俺、すぐに家に帰るから、後頼むわ」

「わかった。その代り、俺が掃除当番のとき、替わってくれな！」

「わかってる」

慌てた私はホウキを手渡し、裏門からカバンをぶら下げ一目散に家の方に逃げた。

この週の日曜日である。近所の子供達と中学校の前にある公園で草野球をしていた。一塁を守っていた私の方へ、富永が体のでっかい高校生と一緒にやって来た。

「こいつや、俺を殴ったのは！」

「こいつか。名前は何と言うねん！」

「呉や！」

「呉？ひよつとしたら、あの横町の呉なのか？」

「そや！それがどうしたんや」

「呉の弟か！それあかんわ。おまえでは勝たれん。ここの兄弟は喧嘩が強いし、それになあ、勉強もできるんやで」

呉の兄弟と知った高校生は笑いながら富永に言った。その日高校生は高校二年生であった次兄を良く知っていた。その日以来、富永は私を見ると、

「怪物！」

と呼ぶようになった。また、

「ヤクザになったら大物になるわー」

とも、言っていた。

体格は完全に大人になっていた高校一年生のときである。教室でバスケットボール部の大男と言いついに合った。相手の男は腹の虫が治まらなかったのか、「いずれは決着を付けよう！」と言いつ出した。

それから十数日後、「大和川の決闘」と言われる「差し（一対一）」の勝負が行われた。その日の授業が終わった後、

「呉、今から俺と大和川に行こう！」

と、相手の男が誘った。学校の近くを流れる川である。着いた場所は、長さが二百メートルはあったであろう鉄橋の下
の川原であった。

「呉！これをおまえが使いえ！」

相手の男は学生服のポケットから折り畳式のジャックナイフを差し出した。私は黙って受け取りながら相手の男の手を見た。両手には茶色い皮手袋がいつの間にかはめられている。男は上着で隠れている腰のベルトからさやに収まった短刀を取り出した。明らかに、ジャックナイフよりは長かった。

「ちよっと、ずるいの違うか？それと交換せんか」

それを見て、武器の違いに腹を立てた。

「やかましい！そのナイフはいらんのか！」

「いるわ。無いよりはましや」

私はそれ以上文句を言わなかった。武器の差で、負ける気はしなかった。なぜならば、中学生の三年間、部活が剣道部で部長を務めていた。中学部の剣道の東大阪大会では個人戦の決勝で「小手」で負けたものの、準優勝をしている。

「良いか、列車が鉄橋を渡り始めたら、始まりや。渡ってしまつたら勝負はそこで終わりや。ええな！」

「わかった」

私は、思い切り刺せばジャックナイフでも相手が死ぬかもしれないと不安になり、腰にぶら下げていた日本タオルを刀身数センチだけ出して、ジャックナイフに巻き付けた。しばらくして、列車がゴットン、ゴットンと音を立てながら鉄橋近くにやって来た。

突然、相手の男は左手にジャックナイフを持って身構えていた私の右手を短刀で斬り掛かった。右手の甲から血がピューと噴き出した。

それは、中学生のとき見た黒澤明監督の「椿三十郎」の最後の一騎打ちのシーンで、主演である三船敏郎に斬られた仲代達矢が腹から血を「ピュー」と噴き出すような感じであった。

「卑怯だ！まだ、列車が鉄橋を渡り始めていないぞ！」

噴き出した血を見て、頭に血が昇った私は「小手！小手！」と声を出しながら、何度も何度も相手の男の手首をジャックナイフで斬り付けた。

列車は鉄橋を渡り終えた。斬り付けるのを止め、一步身を引いた。二人は向かい合ったままであった。手にジャックナイフを握り身構えていたが、相手の男は立ちすくんでいた。

「負けた…」

と、その男は小さな声で言った。一瞬、何を言ったのか聞こえなかった。相手の男が茶色い皮手袋を手から外した。その右手から血が流れ出していた。皮手袋の中は血で赤く染まっていた。

大学受験を迎えた高校三年生のときである。他のクラスに同じ中学校に通っていた友人がいた。午後の休憩時間、私はそのクラスに彼を訪ねて行った。彼は勉強家で医学部を受験しようとしていた。席に座っている彼を数人の男子生徒達が囲んで何やら嫌がらせをしていた。彼は黙ってうつむいていた。

「止めたれや！」

と、嫌がらせをしている男子生徒達に向かって言った。

「何を！おまえには関係ねえだろう！」

「関係ねえことはない。俺の友達や！」

「それがどうしたんや！前から、おまえを気に食わん奴だと思っていた！」

何となく「気に食わん」と言った男から目を付けられているのは以前から気付いていた。がっしりした体格の男であった。そのときは、この男が学校を仕切っている番長であることを知らなかった。

「おまえ！俺に付いて来いやー」

「行ったら！」

私は先に歩く番長の後を付いて行った。

「おーい！喧嘩が始まるで！」

と、嫌がらせをしていた男子生徒の一人が周辺の皆に聞こえるように叫んだ。付いて行った場所は男子生徒のトイレであった。番長の子分達が広さ十二畳ほどの手洗い場に立つ二人を円形に囲んだ。その後ろのトイレの出口ではやじ馬が集まっていた。後ろの方に立つ男子生徒は背伸びをして眺めていた。

「おまえ、勝負する気か！」

番長はいきなり殴り掛かった。番長の拳が私の顔面をとらえた。よろめいた。

「ここで倒れたら、格好つかん！」

倒れそうになつては、両足を踏ん張って殴り返した。私は

番長が三発手を出しても、一発しか殴り返せなかった。

が、その一発が見事に番長の口の辺りをとらえた。番長の右手のガードが甘かった。私は左利きである。口元から血が飛び散った。血は手洗い場の白い壁を一部赤く染めた。番長はよるめきながらしがみ付いて来た。その様子を見ていた子分達が二人の間を割った。これで勝負が終わりだと思った。

「顔を洗えや！」

と、口元から血を出している番長に声を掛けた。番長は手洗い場の水道で顔を洗い、自分の一人からタオルを受け取った。次ぎに私がかがんで顔を洗い始めた。突然、顔面に足が飛んで来た。番長の足蹴りであつた。鼻から血が噴き出し、一部赤くなつた手洗い場の白い壁をあたり一面に赤く染めた。

「卑怯な真似をするな！」

と言つたが、一瞬息を吸うことができなかつた。今度は私が番長にしがみ付いて行つた。クリンチであつた。

午後の授業の開始チャイムが鳴つた。二人は教室に入れるような姿ではなかつた。仕方なく番長の手下一人を連れ、学校を抜け出した。その足で近くの病院に行つた。

口の周りの肉が裂けていた。数針縫つた。窓口で手術代を支払う段階で、

「呉、手術代を出せや」

と、番長は言つた。

「そんな金なんか、あるか。どうしても払えと言うなら、もう一度喧嘩のやり直しや！」

支払を拒否した。

「わかつた。おまえが支払つとけ！」

番長は支払いを手下に命じた。手下はしぶしぶ財布から大枚を取り出すと、窓口の事務員に支払つた。私には払えるような金額ではなかつた。病院から三人は出たが、学校に戻ることはできなかつた。

昼弁当を食べていなかった二人は喧嘩でより腹が減つていた。病院の近くのお好み焼き屋に入った。三人は大きな鉄板を囲み、お好み焼きを食べ始めた。番長は口の傷がうずくのか、痛そうにお好み焼きをへらで小さく切つては食べていた。

「しかし、手が速いなあ」

と、私はお好み焼きを口に運びながら番長に言つた。

「そらそうや、ボクシングしとるからなあー」

と、手下が代わりに答えた。

そこで、初めて番長がボクシングに通つており、少々名の売れたボクサーであると言ふことを知つた。(そうだったのか。道理で手が早い!)と納得した。

「おまえもなかなかやるなあ―」

と、番長は鉄板の上のお好み焼きの焼き具合を気にしながら言った。結局はこの食事代も手下が支払った。

その日、嫌がらせを受けていた友人の家に泊まった。母親の怒った顔が浮かんで帰れなかった。母親はしょっちゅう喧嘩をしてくる私には手を焼いていた。夜遅くなると「どこでまた喧嘩してきたのか!」と良く言っていた。

友人の家は薬局で、彼の部屋は二階にあった。一階で薬の調査をしている父親に気付かれないように、階段を静かに上がって行った。夜になると、友人は一階から傷薬と眼帯を持って来た。誰が知らせたのか? 大学生の次兄が学校に駆け付け、学校の自転車を借りて大和川の周辺を探していたと、後に次兄から聞いた。

翌日、友人の家から眼帯を付けて学校に行った。番長はマスクをしていた。早速、職員室に呼ばれ、

「これから一ヶ月間、毎日その日の反省文を書いて、職員室に持って来るように!」

と、教頭と担任の先生から言い渡された。二人の表情にはどこか「良くやってくれた」と言わんばかりのようであった。

番長は一ヶ月間の停学処分を食らった。

あつと言う間に、この喧嘩は学校中に広まっていた。トイ

レで大便をしていたとき、

「聞いたか? 昨日、番長と殴り合いの喧嘩をした奴がおるんやで」

「そいつは、誰や?」

『『Aクラス』の奴や』

「勉強のできる『Aクラス』にそんな奴がおったのか?」

「呉と言う奴や!」

「すごい奴がああクラスにもいるんやなあ!」

立小便をしながら話している男子生徒達の声が耳に聞こえた。

「えらい有名になっているんやなあ:」

と、私は狭いトイレの中でまんざら悪くない気分だった。高校生であった妻はこの喧嘩のことを知っていた。が、何も言わなかった。

この事件後、私に会うと、帽子を脱いで挨拶をする一、二年生の悪の連中もいた。

「呉、俺なあ、いつも番長にたかられていたんや。この間も買ったばかりのカメラを取られたんや」

ある日、番長の子分である同じ三年生の、にきび面の三吉が言った。三吉は私が毎朝学校に着くと、すぐに学校の最寄りの駅から一駅の駅前にある喫茶店に連れて行っては、

「呉が来たから、その席を空ける！」

と言って、奥のゆつたりした席に通すのである。この喫茶店には周辺の高校の不良学生がたむろしていた。店の中には、学生服の上着のボタンを外してすそ幅の広いラップズボンを着履いた男子学生や頭の毛を染めてマニキュアをした女子学生がタバコを吸っていた。

「タバコを吸えんか？」

と、三吉はタバコを勧めた。私はタバコを吸ったことはなかった。このような雰囲気の中ではタバコを吸ったこととはなるとは言えなかったし、断るのは格好が付かないと思った。

「吸うよ」

と、おもむろに応えた。三吉はタバコを吸っている女子学生から数本のタバコを取り上げ、私に渡してタバコに火をつけ、自分のタバコにも火をつけて吸った。私は少々タバコの煙にむせた。初めての経験であった。

モーニングサービスの値段は百円であった。コーヒーを頼むと、トーストにゆで卵そしてピーナツが付くと言う、私にとっては豪華な朝食であった。食べ終わると、

「呉の分、払っとけ！」

と、いつも三吉は誰となく言うてはコーヒ代を払わしていた。この時期は自分の進学コースに合わせて授業科目を選択

できるので、午前中の科目は受けていなかった。この喫茶店で朝食を取るのが楽しみであった。

いつの間にか、私はこの喫茶店のジュークボックスからいつも流れる尾藤イサオの歌が好きになっていた。今も忘れられない歌である。その曲は尾藤イサオの「悲しき願い」だったと思うが、最後の歌詞は「…皆おいらが悪いのさー」であった。

大学生になってからは、殴り合いの喧嘩はめっきり少なくなった。大学生時代から学生運動や政治運動に参加したせいもある。だが、全くなかったのではなかった。

大学一年生のとき、雨の降る夕暮れ、帰省した私が友達と別れて、鶴橋駅から実家に帰る途中の路上で

「面を切ったな！」

と、ヤクザに言われて路地に連れ込まれた。先に歩くヤクザを後ろから羽交絞めして、水たまりに倒し、馬乗りになって顔を殴った。殴っている途中、ヤクザの胸元にドスがあらるのを見て、

「やばい！」

と感じた私は急いでヤクザを突き放すや、履いていたサンダルを手にし、一目散に走って逃げた。サンダルを捨てて逃げる訳はいかない。母親になくした理由を聞かれば、喧嘩が

ばれると思ったからである。

「この野郎、逃げるのか。待て！」

ドスを振り回しながらヤクザが追いかけてきた。

〈逃げるのも喧嘩のうち〉

と独り言を言いながら、裸足^{はだし}で走った。

大学院一年生のとき、研究室で横暴な振る舞いをしていた一つ年下の男性職員を殴ったことがあった。その職員が独身のときである。同じ研究室にいる先生や大学院生から恐れられていた。私のいる院生室に来ては、一つ先輩の院生に嫌がらせをしていた。原因は、その院生が男性職員の好きな女性職員に何やらちよつかいを掛けたと言うことらしい。その男性職員が来ると、その先輩の院生は下を向いて、その職員のネチネチした言葉の嫌がらせを黙って受けていた。その院生室には彼と同期の先輩と一年上の院生が二人いたが、彼らも黙っているだけでそれを止めようとはしなかった。私はその職員が院生室に来るのがうっとうしいかった。

ある日のこと、嫌がらせを受けている院生と同期である先輩と研究室内の談話室でお茶を飲んでいたときのことである。何かの言葉のほずみで、

「おまえ、嫌がらせをするのも良い加減にしるよ！」

と、白いベニヤ板とドアで仕切られた隣の部屋にいたその

職員に怒鳴った。

「何！」

と言いながら、その職員はドアを思い切り蹴^けり開け、手にスパナを握って談話室に飛び込んできた。座っていた私の頭の上にスパナを持ち上げた。瞬間、私の拳^{こぶし}がその職員の顔ををとらえた。

「ドターン！」

と音を立てながら、背後の白いベニヤ板に倒れて行った。白いベニヤ板に血が飛び散った。もはや手向かってくる様子はなかった。これを見ていた先輩は驚いて院生室に引っ込んでしまった。

この後、この男性職員は大学のそばの日赤病院に行った。傷の治療費を要求されたが、当時助教教授であった岡田教授がその治療費を払ってくれたと記憶している。数日間、その職員は休んだ。

「あんなに、見事に決まるパンチは、映画しか見たことはない！」

と、院生室に引っ込んで行った院生は言った。名古屋を去るときに私に「人間^{じんぐわん}、いたるところ青山あり」と言った助手の松田先生が、

「呉君は、昔はどのぐらいの回数で喧嘩をしていたの？かな

りした方だろうか？」

と、談話室で尋ねた。

「年に二回ぐらいしかしていませんでしたよ」

「えー、年に二回しか、とんでもない。二回もしていたのか。

多いなあ！」

と、松田先生は驚いた顔をして言った。

「え！そんなもんですかね？」

私は年に二回は少ない方だと思っていた。松田先生にすれば多いと言うことである。生い立ちの環境の違いを感じた。

この事件後、

「呉さんは、怪物ですよ」

と、研究室に戻って来たその職員は言った。そのうち、私と仲良くなった職員は好きだった女性職員と結婚した。私も結婚式に招かれた。嫌がらせを受けていた院生は研究室を去った。去るとき、私に自分が使っていた英和辞典を記念に手渡した。今も彼の名前が最後のページに書かれているこの辞典を使っている。

危険との遭遇

私は職場では防災関連業務を担当している。自然災害を防

ぐと言う仕事には、当然危険な場所に出掛けざるを得ない。

その際には、あらかじめ現場の荒廃状況を航空写真で判読し、ある程度把握しておいてから、現地に入るのが通常である。

入社の翌年の夏、群馬県から委託された同県内の土石流危険渓流調査のため、一班三人体制で現地に入った。私は三人のうち最年長でもあり、砂防を専門とする立場から班長として行動していた。

その日の午後は、砂防ダムの規模や堆砂状況を調べるために、高さ十メートル以上もあるダムに向かった。向かう前に、旅館で作ってもらった昼弁当を食べながら少々休憩を取ったが、午前中に調査した上流のハードな渓床堆積土砂の計測と、朝から降りしきる雨の中で私の体力はかなり消耗していた。他の二人も同様であった。

斜面から一メートル下にあるダムの袖部そでにまずは降りることにした。私は夏草が長靴に絡んでいるのを気付いていたが、腰をかがめて、絡む草を取り外すのが面倒くさくなっていた。飛び降りればその力で絡む草は切れるであろうと思っ

た。先頭に立った私はそのまま「エイ！」とばかりに飛び降りた。が、前に出るはずと思っただ足が動かずに、重たい頭だけが前に行き、頭の方から落ちて行ったのである。

眼前に見えるのは、十メートル下方の厚いコンクリートでできた水たたき工（越流落下水によるダムの底抜けや転倒破壊を防止するための工作物）だけであった。

「これは死ぬなあ！生きても重傷だなあ」

頭から落ちながら一瞬であるが、不思議に考える余裕があった。ところが、水たたき工にたたき付けられる寸前の二、三メートル手前で、左手は斜面から突き出した木の枝をしっかりとつかまえていた。

「呉さん！大丈夫ですか！」

次に降りるはずの社員が大きな声で枝にぶら下がっている私に向かって叫んだ。私は枝から木に乗り移り、

「おい！ロープで早く俺を引き上げてくれ！」

と、上にいる二人に向かって叫んだ。しばらくして、ロープが投げ下ろされた。飛び降りた地点まで腰に巻いたロープに引っ張り上げられながらはい上がった。

「どこが、ケガはありませんか？」

「うん、大したことはない。ただ、左手がうまく動かないよ
うだ」

「戻って、医者に診てもらいましょう」

「うん、そうするか、今日はこれで引き上げるか」

私はマヒした左手をタオルで巻き付けながら調査を中止

した。雨の中を旅館に戻ったのは夕暮れ前であった。これは一瞬の出来事であった。

同じ年の冬のことである。じわじわと押し寄せる死の恐怖を経験した。東北地方の飯豊山系の砂防調査で現地には、三人で出掛けたときのことである。

この調査では、まず空中写真で斜面の崩壊状況を判読し、崩壊が起きている個所のうち、代表的な崩壊地について、現地でその規模や崩壊深を調べると言うサンプリング調査の仕事を行うものであった。空中写真からみると、サンプリング調査に適合する大小の崩壊地が数多く点在する場所は飯豊連峰から日本海に流れ込む加治川の上流の奥深い斜面にあった。その場所に向かう前に、地元の村役場に立ち寄って現地の状況を聞くことにした。

「大丈夫ですよ。雪がそんなに積もっていませんから。そこには山小屋があつて、車が通れない場所から歩いて一時間ぐらいで行けますよ。途中につり橋があるので、まだ大丈夫かその様子も見ておいて下さい」

と、応対に出た職員が気軽に言った。

「わかりました。早速、今から行ってみますよ！」

役場から出た三人は、役場の駐車場に停めておいた会社の

車に乗り込んだ。三人とは、私と中田そして大室であった。

中田は大学時代の二年後輩であった。大学時代はサッカー部の正選手で、足の速い小柄なスポーツマンであった。卒業後は離島の先生になりたかったと言う。大室は某私立大学大学の修士課程を修了し、今年入社した青年で、最近結婚したと言う。

三人は、目的地に向かつて車を進めたが、途中で道幅が狭くなり、車の進入はこれ以上無理な場所に来た。

「あの職員が言った『車が通れない場所』とは、ここのことだな」

三人はそう感じ取った。そこで車を停めて、装備を分け持つて登山道を歩くことにした。このとき、私だけはリュックの中に着替えを入れなかった。

「二時間ぐらいで、ここに戻れるだろう」

と、勝手に思い込んでいた。歩き始めたのは昼過ぎである。この季節は日が暮れるのが早い、明るいうちに戻れるであろうと考えていた。私はだいたい色のカップを着込んでその上にリュックを背負い、手袋をはめ、長さ一メートルのポールを一本持って登って行った。

しばらく歩くと、急な崖の岩盤に「わが息子。ここに永遠に眠る」と言う文字が刻まれているのが目に入った。その周

辺の岩盤のあちらこちらに同じような文字が刻まれていた。

「恐らく、この山で遭難した人達の肉親が誰かに頼んで刻んでもらったのだろう」

と、時折立ち止ってはそれらの碑文を読んでいた。

歩き始めの頃は、少々雪がかぶった程度で登山道ははつきりと輪郭を現わしていたが、役場の職員が様子を見て欲しいと言っていた途中のつり橋を渡った付近から、急斜面の中腹に延びる道中には雪が二十センチほど積もっていた。半時間ほど歩いたとき、

「あそこに、サルがいるぞ！」

と、先頭で歩く私は声を上げた。

「すごい数だなあ！」

私の指さす方向に目をやった中田と大室は驚嘆した。急斜面にある木々の枝に毛のふさふさとしたサルの群れがたわむれていた。そのうちのボスらしい大きなサルが歩く三人を警戒しながら眺めていた。それを知った中田が一メートルのポールの先をそのサルに向けた。まるで銃口をサルに向けるような構えをしたのだ。すると、それを見たボスサルは中田に向かつて両手を胸の前で合わせ、頭を下げる仕草をした。

「鉄砲かと思つて、撃たないでくれと拜んでいるようだなあ」

と、三人はその姿を見て笑った。サルにとっては気の毒な

ことである。

降りしきる雪はますます激しくなってきた。登るにつれて、幅一メートルもない登山道がどの辺りで急な崖がけつ縁ぶちになるか、降り積もつてゆく雪のため、はつきりしなくなってきた。ときには、三人は山側の切り立った崖の壁面に背をつけながら、カニのように横歩きをして、道から踏み外さないように一歩一歩進んだ。このような雪道を歩くのは、積雪のない道に比べて何倍もの時間が掛かるし、体力も極端に消耗するものである。

一時間が経つても、二時間が経つても教えられた山小屋が見えない。黙々と歩き続ける三人は、お互いに声を掛け合おうとはもうしなかった。一体この先はどうなるのか不安だった。

「ひよっとしたら、俺達はこの山で死ぬかもしれない。…俺がここで死んだら、女房はどうするだろう？大阪で喫茶店でも開いて、子供達を育てていくだろうか？」

私は雪を踏みしめながら、そう思うと涙がこぼれそうになった。私だけではなかった。中田も妻や二人の子のことを、大室も新妻のことを考えながら黙って下を向いて歩いていた。

辺りは暗くなってきた。歩いて三、四時間は経ったであろう。先頭に歩く私の眼前に雪崩が起きていた。崩れ落ちた雪

が登山道をふさいでいた。

「この先はもう行けない！ここで引き返しても、暗やみの中では来た道を見つけることはできない。道を踏み外して崖から落ちるか、途中で凍死するだけだ！」

私はがく然とし、絶望の境地に陥った。そのとき、「下に、山小屋が見える！」

と、大室が大声で叫んだ。数十メートルはある崖下をみると、溪流のそばに山小屋があるのを見えた。

「呉さん、進むしかないよ！」

と、中田が言った。

「そこに、杭くわの頭が見える！」

周辺の状況を見ていた大室が前方の道を指差して叫んだ。よく見ると、二メートル先に先端が輪になっている金属杭が雪の中から頭を出していた。

「あの杭まで飛び越えてみる！」

と中田は言うなり、その杭の頭に向かってジャンプした。そして両手でしっかりとその頭を握りつかんでいた。

「呉さん！そちらから、雪をかいて下さい。こちらからもかくので！」

と、中田は立ち上がって言った。三人は必死になってポールや手で道をふさいでいる雪をかき始めた。数分後、何とか

通れる道が作られた。頭を出していた金属杭の先端の輪にはロープが巻かれていた。所々にある同じ杭の輪に通されているロープが崖の下まで垂れていた。ロープをつたって、三人は崖下に降り立った。

山小屋の前に着いた途端、体がブルブルと震えだした。カッパの隙間からしみ込んだ雪水で体が冷え切っていた。ドアにはくぎが打たれていた。山小屋はすでに閉められていたのである。三人は数枚の板で作られた木のドアを思い切り引っ張り開けた。中に入ると、すぐに中田と大室はリュックに入っていた新しい下着に着替えた。私は着替えを持ってこなかったことに後悔した。が、山小屋の中に一着の黒いジャージーがひもにつるされているのを見つけた。

「良かった！助かった。登山客が忘れて行ったのだろう」
冷たい雪水でぬれていた作業服を脱ぎ、そのジャージーに着替えた。誠に有難い残り物であった。

底冷えのする夜だった。小さな土間で小屋の中に残されていたわずかのマキを燃やして火をおこした。しかし、一向に体が温かくならなかった。

「このままでは、小屋の中で凍死するぞ！」
「もっと、火をおこそう！」

三人は次から次へとマキを火の中にくべた。

「もうマキはない！」

「仕方がない。その板を剥がして燃やそう！」

マキがなくなると、今度は小屋の中の板を剥がしてはマキの代わりにした。夜が深まるにつれ、氷のような風がビュウビュウ鳴りながら小屋の周りをより強くなって吹いてくるのが聞こえた。床の上に敷かれているムシロを掛け布団にして、男同士三人は服を着たまま抱き合って寝た。三人は寒さのためになかなか眠れなかった。

翌朝、風が止んでいた。小屋から外に出ると、太陽の日差しが真っ白な雪を眩しく照らしていた。山小屋から数メートル先の降り立った溪流のそばから白い煙が上がっていた。

「あの白い煙は何だろう？」

と、三人はお互いに顔を見合わせ、その煙が立つ方角に歩いて行った。

「おい、温泉が沸いている！」

「こんな場所に、温泉があるなんて！気付かなかった」

白い煙は温泉から立つ湯煙であった。流れの速い溪流のすぐそばに、雪をかぶった大小の岩に囲まれた六畳ぐらいの広さの露天風呂があった。早速、三人は裸になり、湯に入った。ほっとするような気持ちの良い温かさであった。

「昨夜、この温泉を見つけていたら、あの寒さはしのげたの

になあ」

と、三人は湯につかりながら言った。「暗やみの中、登山者がもう数歩で山小屋のドアにたどり着くのをわからず、力尽きて玄関先で倒れ死んでいたのを朝方見つけた」と言う話を、私は思い出した。

真っ白な景色の中、三人の話し声以外は、ゴウゴウと鳴り渡る溪流の水の音だけが聞こえていた。

「下山の途中、遭難して死ぬかもしれん。ここで写真を撮っておこう。酒もあれば良いのだが……」

と、私は湯につかっている中田と大室に言った。

「確か、自分のリュックに酒が入っている」

と中田は言って、腰にタオルを巻いて湯から上がった。その姿で小屋に戻り、カメラと酒を持って来た。

「さあ、末期の酒になるかもしれん！」

と私は言った。湯の中で三人は酒を飲み回し、最後となるかもしれない己の姿の写真を一人一人撮り合った。

山を下りるのは、雪が少しでも溶けるのを待って昼過ぎと決めた。それまでは装備の点検や家族にあてた手紙を万が一のために書いた。

「さあ、出発しようか！」

と、リュックを背負った私は中田と大室に告げた。三人は

来た登山道を下って行った。風もなく快晴であった。気温は上昇しているのが肌を感じた。所々、道に凍り付いていた雪が溶けていて歩きやすかった。雪崩でふさがれていた場所は道ができ、歩けるようになっていた。登るときに付いた足跡をたどって下山し終えた。帰りは実に早かった。一時間ちよつとで停めておいた車にたどり着いた。

その足で、村役場に行った。役場に着くや否や、現場に行く前に会った職員をつかまえ、

「良くも、一時間ぐらいで行けると言っただもんだ！」

と、三人はまず怒りをぶちまけ、途中にあるつり橋がまだ安全であることや山小屋に着くまでのこと、山小屋での出来事などを一部始終その職員に話した。

「気を付けて下さいよ。サルも賢くて、鉄砲でないことがわかったらサル達は怒って集団で襲うこともあるのですからね」

と、文句を言われたのに腹が立ったのか、その職員は逆に三人を脅かした。

「しかし、無事に帰って来られましたね。心配していたのですよ！昨日のような雪の降る中で……」

と、最後に職員は本音を吐いた。

「俺達を殺すつもりだったのか！」

三人は怒りがまた込み上げてきたのだった。中田は「命の恩人」となった。甘く見た私の判断と行動はリーダー失格であった。

その日の夕方、体調がおかしくなった大室は電車で新妻のもとに帰った。私と中田は仕事を続行した。翌晩、大室は今回の現場責任者である山本道元に怒りを込めて作業の状況を報告したと旅館に電話連絡してきた。「冬のボーナス闘争」に入ったと言っては、組合運動に情熱を燃やす組合役員の山本は、当初現場に来る予定をキャンセルして会社に残っていたのである。

無事に現場を終えて会社に戻って来た私は、自分の机の上に置かれている写真を見た。大室のカメラで撮ったその写真には、雪を背景に湯船の縁にタオルをひざの上に広げて座っている私の裸の姿があった。男のシンボルの部分がマジックで黒く塗られていた。写っていたのだろう。この後、露天風呂は夏の豪雨で土石流によって流されたと聞いた。

「二度あることは三度ある」と言う。その数年後、山形県酒田市に流れる赤川の上流の大鳥川流域での現場の出来事である。崩壊地を求めて、常に先頭に立って雪の上を歩いていく私が、七、八歳年下である三十歳前後の沢田と組んだとき

のことである。

この頃、沢田は私の仕事を良く手伝っていた。眼鏡を掛けた細身の、つかみどこのない男であった。何事に関しても慌てることなく、常にマイペースに物事を進めるタイプであった。彼の話し方は抑揚を付けて話すことなく、ゆっくりした調子で淡々と話すため、どこに話のポイントがあるのか理解に苦しむことがある。

この男の仕事は、現場と現場で収集したデータを計算・解析することであった。私は彼の計算・解析結果に基づいて考察を加え、報告書として取りまとめていた。私は少々気が短く、何事にもすぐにやらなければ気が済まないタイプであった。

「まだ、出来ないの？ 今日中には計算結果が出せるの？」

と、自分が立てた計画工程に遅れを感じると、その度に沢田に言うのであった。

「そう、焦らないで下さい。呉くさん、大丈夫です。ちゃんとやっておきますから…」

とその都度、急かされても一向に気にせずにおっとりした口調で答えるのである。

その日の翌朝、会社で午後から出勤する沢田の計算結果を午前中に目を通すと、ちゃんとした表に取りまとめられ、考

察しやすいように計算のプロセスや結果について注釈が記されている。滅多に計算間違いがなかった。彼を仕事仲間として非常に信頼していた。

後に、私が考案した手法で、JR東日本から毎年受注することになる「鉄道林機能検査業務」の鉄道林計算・解析システムのソフトを完成させるのが沢田であった。

ひざまで積もっている雪のため、歩くテンポはゆっくりとしたものであった。坂道を登り切ると、広々とした平坦な場所に出た。先頭を歩く私は立ち止った。その平坦な場所の前方に崩壊地が見えた。崩壊面は白い雪が一樣に積もって、はつきりした輪郭を現わしていた。

「あれだ！写真に写っている崩壊地だ」

と、私は手にしている航空写真を沢田に見せながら言った。

「間違いがないようですね」

と、後ろに立つ沢田は白い息を吐きながら応えた。

「ここは田んぼだ。あそこまでは歩きやすい！」

二人はほっとした。

「さあ、行くぞ！」

と言つて、一歩前に踏み出した。途端「ザブン！」と音を立てながら沢田の視線から私の姿が消えた。そこは氷上に雪

が薄く積もっていた池であった。私の体重で氷が割れた。
（どこまで沈んでいくのか！）

手足をばたつかせながら不安になっていった。水面が首辺りになったところで、足が池の底に着いた。池の中の冷たい泥で、両足の自由はきかなかつた。一人で池の岸辺をはい上がることはできなかつた。

「呉くさん、何ともありませんか？」

「池に落ちている俺を見て何ともないことはないだろう！」

「それも、そうですね」

「早く、俺の持っているこのポールで引き上げろ！」

「わかりました」

沢田は私が差し出した一メートルポールの先端を握り、

「うひゃひゃ」

と笑いながら、引つ張り上げた。このときほど、この男を憎たらしく見えたことはなかつた。

車の中に戻り、ヒーターで暖を取ったが、一向にぬれ切った体が温まらなかつた。長靴の底に入った水は氷のように冷たかつた。仕方なしに旅館に戻ることにした。旅館で下着や作業服を着替え、沢田と一緒に宿で作ってもらった昼弁当をストーブのそばで温かいお茶を飲みながら食べた。現場の仕事を終えた帰りの列車の中で、

「呉くさん、飲みませんか？温まりますよ」

と、沢田は駅の売店で買ったワンカップを対面に座っている私に差し出した。日本酒が好きな沢田は先にチビチビとワンカップの酒を飲み始めた。

〈何でも、先頭に歩くのは考えもんだなあ…〉

私は美味しそうに飲んでいる沢田の顔を見ながらしみじみとそう感じた。この三度目の出来事以降、命にかかわるような危険な目に会うことはなかった。そのおかげで、三番目の子を授かった。

娘の誕生と借家時代

暑い八月の夜、仕事を終えて会社から借家に帰って来た私に、三番目の子が生まれたと言う電話が掛かってきた。大阪の病院からであった。「三番目こそは」と男の子を望んでいた私は、電話を切ると、一人静かに家の中で酒を飲んだ。二人の子供も大阪の八尾に住んでいる妻の姉の家で世話になっていた。酔いが回ってきた私は押入れからカセットを取り出し、「子供は三人で打ち止めだ。俺には男の子には恵まれなかった。これは神のいたずらか！」

と、電灯もつけずに酒をチビリチビリ飲みながら、カセッ

トに自分の思いにならなかった不満を吹き込んだ。まるで不運なヒーローのようであった。

翌日、頼まれていた娘の名前を決め、その名を書いた便せんを封筒に入れて妻の元に送った。その名は、

「呉美陽（ミヤン）」

であった。子供達の名前には、「陽（ヤン）」の一漢字が付く。私の四人兄弟の子供達すべてに付けられた。この意味は、「太陽のように輝く人間になって欲しい」と願って付けられた。

兄達は名前の初めに「陽」を付けたが、私は後ろに「陽」を付けた。兄弟の末っ子であったからである。

一週間後、家族を迎えに東京駅に行った。プラットホームで待っていると、新幹線の列車から六歳と三歳の娘と赤子を抱いた妻が出てきた。

「お帰り。皆元気だったか？」

と言いながら、妻が抱く赤子の顔をのぞいた。可愛いかった。家に着くと、

〈皆に聞かれたら、ヤバイ！〉

と、思っ、酔っ払って吹き込んだカセットテープをそっと消した。

呉千陽（チヨニヤン）と名付けられた長女は名古屋で生ま

れた。出産予定日が七夕の日であったが、長女は母親のお腹の居心地が良いのか、なかなかお腹から出て来ようとはしなかった。予定日から二週間が経った。私と妻は入院予定の名鉄病院に出掛けた。

「即、入院して下さい」

と、医者から告げられた。妻はそのまま病院に居残り、私は妻が出産のために用意していた荷物を取りに借家に帰った。真夏の太陽がギリギリ照りつける中、荷物を手にして再び妻のいる病院に舞い戻った。

「帝王切開になるかもしれません。その場合に、何らかの責任については当病院では負えませんので、この書類に押印をお願いします」

と、医者は私を診察室に呼び、押印するように言った。

（お腹の見ぬ子が死ぬことがあっても、妻を生かして欲しい）
押印した私はそう心の中でつぶやいた。当日の産婦人科では産気づく人が多かった。看護婦の手が足らなかつた。

「だんなさん、申し訳ありませんが、そばで奥さんの陣痛が始まったら腰をさすってあげて下さい」

と言われ、私は年配の看護婦に妻と一緒に分娩室に連れられて行かれた。分娩室の中で二人の妊婦が苦しそうな声を上げていた。

陣痛は周期的にやってき、その間隔は短くなってきた。その度に

「痛い！痛い！」

と、妻は声を上げていた。どうしたら良いのかわからず、妻の腰をさすりながら

「母親なら、誰もが経験しているから」

と、苦しむ妻を元気づけるために言った。妻はその言葉にむかついた。

「あなたは、女ではないでしょう。男でしょう。何でわかるの！」

と、汗をかきながら腰をさすっている私に叱った。余計なことは言うものではないと思つた。陣痛がおさまっている少しの時間、私は分娩室から出て、病院の廊下に設置されている赤電話で、

「すみません。どうしたら良いのかわからなくて、こちらに来てくれませんか？」

とわらにもすがる思いで、大阪の八尾に住んでいる妻の姉に言った。義姉は近鉄線に乗ってすぐに行くと言事した。義姉の息子が赤子のときであった。

七月二十二日の午後七時五十五分に、やっと長女がお腹から出て来た。看護婦はガラス越しから赤子を見せた。

「女の出産の一瞬は、男の一年間以上の仕事に匹敵するものだ」

と、私は分身ができたと言う不思議な気持ちになりながら思った。生まれたのは妻の姉が病院に着く二時間ほど前であった。

「すみませんが、どこか部屋が空いていませんか？仕事をしなければならぬので…」

と、出産に立ち会っていた看護婦に尋ねた。

「空いていますよ」

その看護婦は私を空いている病室に連れて行った。そこは個室であった。義姉が来るまでの間、その部屋の机に向かつて、締切りが迫っている学会誌の投稿論文を書いていた。しばらくして、義姉が来た。私はお礼を述べながら義姉を妻と長女のいる部屋に案内した。深夜、妹とその子供を見た義姉は私と一緒に病院からタクシーで借家に戻った。その夜はその家で一泊して、翌日義姉は八尾に帰った。

数日後、一人で妻と子のいる病院に出掛けた。病院の廊下を歩いていると、廊下の片隅で長椅子に座っている四十歳前後の女性がすすり泣いていた。そばにはその女性の夫らしい男性が黙って立っていた。妻と同室のベッドにいた女性であった。

「良かったね、私も初めてできた子なのよ。歳が歳だから、早めに入院しているの」

と言っては、妻に声を掛けていた。私は何度かその女性と部屋で会っているし、彼女の主人が見舞いにやって来たのを一度見ている。主人は四十半ばの歳格好であった。優しくそうな顔付きをしていた。主人はニコニコしながらベッドに横たわっている自分の妻と会話をしていた。

「お母さん！廊下で同じ部屋の、あの年配の女性が泣いていたが、何かあったのか？」

部屋に入るなり、横に長女を寝かしてベッドに座っていた妻に尋ねた。

「実は、流産したの。あれだけ楽しみにしていたのに…」

と、妻は言った。哀れであった。子が欲しくても授からなかったのである。

「無情だなあ…」

と思った。

その三年後に、妊娠した妻は「男は役立たないと」と言って、姉が住んでいる八尾市の近くの病院で二番目の子供を出産した。妻はお腹の調子からして長女のときとは違うと言っ
ては「絶対に男の子」と思っていた。が、丸々と太った女の子であった。その子は呉世陽（セヤン）と名付けられた。

三女が生まれた半年後、会社を休んで、川越市の教育委員会に訪ねた。教育委員会の部屋にはスーツを着た数人の年配の男性がいた。

「すみませんが、私は川越市に住んでいる『呉』と言います
が」

と声を掛け、応対に出た男性にカウンター越しに「農学博士」の肩書きが付いた名刺を渡した。

「どのようなご用件ですか？」

と、受け取った名刺を見ながら応対に出た男性が言った。
「実は、今年の四月から私の娘が小学校に入る予定なのですが。入学案内がまだ来ないので。同じ幼稚園で今年小学校に上がる子供達には来ていると言う話ですが」

「えっ、そうですか？ところで、小学生になる本人の名前は？」

「オ・チョニヤンと言うのですが」

一瞬、名前が聞き取れなかったか、間を置いて

「ひよっとしたら、在日の方ですか？」

「そうです」

「在日の人で、今まで子供の入学の件で訪ねに来られた方はいなかったです。初めてのことで。在日の子には義務教育は

ないため、こちらの方も強制的に入学させることができませ
るので。多くの人は民族学校に入学されるようです」

と、男性はくどくどと説明をしたが、そんなことは知っていた。

「ところで、入学の案内は頂けるのでしょうか？」

「もちろんですとも。お宅が希望されるならば」

「早速、お願いします」

後日、幼稚園から小学校への入学案内と手続きの書類を長女が持って帰ってきた。この入学に当たっては、「在日本朝鮮人総連合会」埼玉県西支部の年配の女性幹部から

「てっきり、大宮にある『ウリ（我が）学校』に入れると思
っていたのに……」

と恨まれた。また長兄からは、

「わたしの兄弟の子供達は民族学校に入れてるのに。なぜ、
日本学校に入れたのか。朝鮮学校に入れなかったのか！」

と、私は電話で怒鳴られた。心は動揺したが、

「自分が決めれば良い。自分の子供達のことだから」

と、直ぐ上の兄は言った。その言葉が決定的なものとした。
後に、私は名古屋の「科学東海」の在日の機関紙に次のよう
な文面を送っている。

「民族学校が日本の学校のように全国各市町村にあるのでな

く、通学が不便である。日本学校に就学させたとしても小生が居住している川越市では朝鮮・韓国籍の児童が本名でもって小学校に通っているのは三人で、そのうちの二人は小生の子供である。まだ、小学生と言う年齢である子供にとつて本名を使つて、学校を通うことは『朝鮮人の誇り』があつたとしても、特別の目で見られるのが嫌であるらしい」

これは、長女のチョニヤンと次女のセヤンが小学生、三女のミヤンは幼稚園の年長組みであつたときの文面である。

三女が生まれて間もない頃は、私は本川越駅まで自転車に乗つて会社に通つていた。

晩秋のある日のこと、川越で借家を探すためにやつて来たときに見掛けた、壊れかけの土蔵の「飲み屋」に自転車で立ち寄つた。中を入ると、

「いらつしやい！」

と、一人で焼き鳥を焼いている女主人の元気の良い声が出た。時間が早かつたせいも、客は誰もいなかった。カウンターの席に座り、日本酒の熱かんと数本の焼き鳥を頼んだ。女主人は四十歳ぐらいに見えた。どこか顔つきは同国人のよう感じた。私はその女主人と会話をすることもなく、飲み食いをしていた。一時間余りはいただろうか、カウンターの上

に代金を置き、その「飲み屋」を出た。酔いが回つていた。自転車を乗つて、自宅に向かった。途中にある田んぼのあぜ道を通り掛つたとき、自転車の前輪が田んぼの方へすべり落ちた。

「ああ、これは田んぼの中に突つ込むなあ」

と思つたが、ハンドルを切ることなく、ブレーキを掛けることもなく、そのまま自転車と共に、田んぼの中へ落ちて倒れ込んだ。

「落ちてしもたか……」

落ちたまま、しばらくは空の星を眺めながら、田んぼの上で横たわつていた。

「三人の父親になつたのか。俺の父親のようになってはいかんなあ……」

とつぶやいた。気を取り直して倒れている自転車を起こし、その自転車を引っ張りながら家路に着いた。自転車を玄関の脇に置き、

「ただいま！」

と言いながら、玄関のドアを開けた。

「お父さん、お帰り！」

三歳になる次女のセヤンが玄関まで出迎えてくれた。が、私の顔を見るなり、

「お化けや！」

と叫びながら、セヤンは母親のところへ駆け戻った。

「一体、どうしたの？顔から血を出して」

妻は玄関に出て、私の顔を見て言った。眼鏡の片方のレンズは割れ、顔から血が流れ落ちていた。顔の左半部が擦りむいていた。情けない姿の父親であった。自転車でも「酔っ払い運転」になることを自動車教習所で教わったことを思い出した。

翌年の春、私達家族五人は、「在日本朝鮮人総連合会」の埼玉県西支部が主催の「花見」に参加した。場所は狭山湖であった。肌寒かった。川越はもとより東松山や所沢周辺に住むトンボ（同胞）が集まっていた。支部の委員長が、「名古屋から来られたオ・テブン氏とその家族です。現在、川越に住んでおり、西武グループの会社に勤めているのとです。農学パッサ（博士）です」

と、皆の前で紹介した。

「アプロ、プタハゲツスンミダ（これから、よろしくお願ひします）」

と、私は簡単な挨拶をし、家族を紹介した。

肉などが網で焼かれている七輪（土製のコンロ）を囲んで、

地区ごとのトンボ達が焼肉を食べては、ビールを飲んでいた。

その輪の中に、壊れかけた土蔵の「飲み屋」の女主人がいた。

かつて「ウリ（我が）学校」の先生をしていたと言う。

「オ・テブン氏は、西武グループの会社に勤めているのですか？パッサ（博士）なんですね。大したものですよ」

委員長の紹介を聴いていた、私と同じ年頃の川越地区の分会長が言った。男性達はそろそろ酔いが回ってきていた。中には、ビールを止めてアルコールの強いマッコリ（米で作った濁り酒）を飲み始める者もいた。

「この間、貸した金はいつ返してくれるのか？」

「もう少し、待ってくれ」

酒の量が増すにつれ、男性達の間でそんな会話を始める者もいた。集まっているトンボ（同胞）の中には「金融業」をしている者が何人かいた。在日コリアンの職業は「パチンコ屋」「焼肉屋」「金融業」などが多かった。日本の企業でサラリーマンをしている者は極めて珍しのが当時の現状であった。

「花見」の宴は終わった。帰りしな、娘を「ウリ（我が）」

学校」に入れると思っていた埼玉県西支部の年配の女性幹部とその夫が、私達家族を車で高麗神社に連れて行った。

高麗神社は、埼玉県日高市にあり、八高線高麗川駅を下車し、高麗川駅から高麗神社までの距離は歩いて二十分のとこ

ろにある。高麗神社の主祭神はかつて朝鮮半島北部に栄えた高句麗国からの渡来人高麗王若光である。高句麗国は六六八年に唐と新羅によって滅ぼされている。若光は七一六年に武蔵国内に新設された未開の原野であった高麗郡の首長として当地に赴任し、高麗人一七九九人と共に当地の開拓に当たったと言う。若光が当地で没した後、高麗郡民はその徳をしのび、御霊を「高麗明神」としてまつた。これが高麗神社創建の経緯らしい。高麗神社は若光の子孫が代々宮司を務めている。「出世明神」とあがめられている。

私は、高麗神社の存在と、呼び名が「コウマ」でなく、「コマ」であり、「高」を韓国・朝鮮語読みの「コ」と呼んでいることを、また高麗王若光とその一族は朝鮮半島を離れ、関東の武蔵の地で骨を埋めたことを初めて知った。

会社に入ってちょうど一年後の三月に、会社は利益があったとして、全社員に年度末特別ボーナスを支給した。私はその金で自動車教習所に通うことに決めた。自動車免許を取ることに積極的でなかったが、仕事上車で現場に行くことが多く、いつまでも他人に運転させるのは悪いと思っていた。

入社して数カ月後、

「自動車免許を取らないのですか？」

と、言葉こそ丁寧であったが、課長である水山から私は言われた。

「しばらく待って欲しい。今、免許を取りに行くためのまとまったお金がないので……」

と答えたが、

「そんなはずはないでしょう。大学院まで進学するぐらいなので、お金には困っていないでしょう。親から借りれば何とかするではありませんか？」

と水山は言った。

「あのね、大学院まで行ったからといって、皆が経済的に裕福な家庭で育っているとは限らないですよ」

「そんなことはないでしょう。私は大学にも行きませんでしたよ。経済的な理由でね」

水山は高卒で、大学や大学院に行ける者はすべてが裕福と思っているようであった。

「あなたの方が、働き始めたのが早く、独身だから貯金がいくらもあるかもしれませんが、私は妻子持ちで今年から働き始めたばかりなので一銭もありません。あなたの方が裕福ですよ。私はバイトをしながら、大学院まで行きましたよ」

と、水山に言い返した。

私は小学六年生からバイトをしていた。町工場でズボンに

付けるフラスナーの形を整えて加工する仕事で、一日働いて百円であった。昼休みに食べる「すうどん（つゆをかけただけのうどん。主に関西で言い、関東ではかけうどんと言う）」が一杯二十円の頃である。中学生や高校生時代のバイトは、牛乳配達、印刷工場、ペンキ塗り、早朝魚市場などの肉体労働が主なバイトであった。もらった金はほとんど母親に渡していた。

母親に言われ、実家の斜め向かい側にある高村の旋盤工場、長さが数センチの円柱金属棒の穴を開けるバイトを高村生の夏休みにしていた。朝食を食べ終えると、すぐにサンダルを履き、二、三秒歩いて行けるその工場に着く。工場と言っても、従業員はバイトの私だけである。高村のおやじさんは、夜遅くまで穴を開けた円柱の金属棒を木箱のケースに入れ、運搬自転車の荷台にそれを積み、どこやらに運ぶのが朝一番の仕事であった。戻って来ると、私と同じように小さな椅子に座り、旋盤を動かす。私はこのバイトを一ヶ月ほどした。休みは日曜日だけであった。

毎日が同じ繰り返しである。単調な仕事で会話はなく、今までのバイトの中でこれほどつまらん仕事はなかった。朝から晩までラジオが付けっぱなしで、今日どんな番組があるか覚えてしまっていたし、番組の進み具合で「今は何時」であ

るかをわかっていた。

このバイトを始めて半月が経った。いつものように私はラジオから流れる音楽を聞きながら旋盤を動かしていた。高村のおやじさんは私が座る席の前にある椅子に座って黙々と仕事をしていた。上半身はランニングシャツだけで、首にタオルを巻いていた。そのタオルで顔に流れ落ちる汗を時々ふいていた。近くに扇風機が一台あるだけである。ふと、高村のおやじさんの背中に目をやった。背中から吹き出る汗がランニングシャツをぬらしていた。

「俺はこんな仕事で一生汗を流したくない。勉強をしなれば……」

と、私は大学に進学することを硬く決心した。高村のおやじさんは妻子持ちの四十歳前後で同じ在日二世であった。

「大体、高学歴者は実技試験に通っても、不思議に最終の筆記試験で落ちる。自分も筆記試験に一度落ちているから」

と、第二課長の柴田が自動車教習所に通う私に言った。「筆記試験を一発に通ったら、どうする？」

と聞いた。

「ビールを一本おごるよ」

と、柴田は自信ありげに言った。人によって、ものの考え

方が色々あってしかるべきであるが、柴田は自分の尺度で物事を計り、それにすぐわなないものは間違っていると言う観念が非常に強かった。

自動車教習所内の実技教習のとき、二羽のスズメが道路の上には舞い降りた。私は舞い降りたスズメの手前でクラクションを鳴らした。スズメはクラクションの音で驚き、飛び上がったが、横の助手席で居眠りをしていたかのように目をつむっていた教官が、

「こんなところで、クラクションを鳴らす馬鹿ばかがいるか！」

と、クラクションの音で驚いて目を開け怒鳴った。この日は不合格であった。怒鳴られる度に胃が痛む思いであったが、「我慢、我慢……」

と自分に言い聞かせ、練習を繰り返していた毎日であった。会社のフレックスタイム制を利用し、数ヶ月の間、通った自動車教習所の実技試験と免許センターでの筆記試験も何とか一発でパスしたが、実技の受講回数は少々多くなり、周囲が言う「年相応のお金」を支払った。年度末のボーナス支給額は二十五万円であったが、掛かった費用は約三十万円となった。

「さあ、おごってもらおうか」

と、私は酒の席で柴田に言った。

「わかっている。まさか、呉さんが一発で試験に受かるなんて……」

と言いながら、柴田はビール一本を振る舞った。

サラリーマンになると、カラオケで歌う機会が多くなった。私は決して歌が上手くなかった。音痴であった。小学校から中学校時代の音楽の時間に一人一人がピアノに合わせて歌う試験があると、声が震えて歌えなかった。当時の通信簿は五段階の評価で「五」が最高であった。歌の試験がない筆記試験だけの成績で評価された学期の成績は「五」を取ることもあったが、歌の試験だけの場合は五十人中後ろから三番以内の「一」であった。いかに歌が下手くそかわかる。

当時の社長であった高木と、二次会で「スナックバー」に行ったことがあった。社長のお供は十数人いた。その日の店は会社の社員で貸し切り状態であった。誰彼なしに、マイクを持ってはカラオケの伴奏に合わせて歌っていた。

「呉！歌ってみろよ！」

と、酒の酔いが回って、顔を赤くした高木が言った。

実は、この社長と私との間には気まずい出来事があった。

入社して一年が過ぎた頃である。会社の創立二十周年記念行事での一泊旅行に参加し、夜の大広間での参加者全員による

宴会が終わった後、社長を含めて数人がホテルの中にある「バー」に行った。私と高木は隣同士の席で酒を飲みながら、少々感情的な議論を交わしていた。

「博士と社長はどちらが偉いのか。やれ、やれ！」

と、長年この会社に勤めている一つ年上の渋谷が突拍子のない言葉を言った。これには高木は激怒した。

「社長の方が偉いきまつとる！ 呉は雇われの平社員だ！」

と、皆に聞こえるよう大声で渋谷を一喝した。

「あんたも、雇われ社長やろう！」

と、私は言いたがったが、

「呉、我慢しろ！」

黙って二人の話を聞いていた専務が止めた。止められた私の目は悔し涙で潤んだ。

「下手くそで、聞かせるような歌ではありません」

と、他人の歌を聴きながら酒を飲んでいた私は返事した。

「そうか、それなら加藤とデュエットしてみろ！」

同じように、歌うのが苦手な加藤とマイクを持ち、童謡のような曲を選んで歌った。二人とも音程と調子が全然合わなかった。

「下手くそ！」

と言いながら、高木は大笑いした。

「下手だと言っただろう！」

歌い終わった私はむかついた。この日から、同僚から「二曲を歌えるようになれば、場をしのげる」と聞いて、カラオケを練習することにした。

ある日曜日、五歳になる長女のチョニヤンを連れてパチンコ屋に入った。玉がパチンコ台の下に置かれているケースの半分ぐらいに貯まると、すぐに景品に換えた。買ったのは、都はるみの「大阪しぐれ」と竜鉄也の「奥飛騨慕情」のカセットテープであった。

休みになると、一人カセットテープを何度も巻き戻してはセルロイドでできたおもちゃのマイクに向かって歌の練習をした。ときには、座布団をステージに見立てて、その上立ち歌っていた。これを見た妻は、

「このおっさん、どうしたのだろう？」

と心配し始めた。

「お父さん、うるさいよ！」

「いい加減にしてよ！」

「一向に、上手くならないのね。あきらめたら……」

ついに、子や妻が言い出した。それでも、テープを巻き戻しては練習し続けていた。涙ぐましい努力であった。

その成果は、翌年の夏に催された会社の「盆踊り大会」で示された。その日は休日で、会社の玄関にある駐車場の中央にちょうちんで飾れた「やぐら」が生まれ、片隅には「金魚すくい屋」や「焼鳥屋」それに「焼きそば屋」などの出店が作られた。三女のミヤンが生まれて間もない私の家族五人は昼過ぎにその祭りの場に着いた。長女と次女はすべての物がただで食べられて遊べるのが嬉しいのか、あちらこちらの出店に顔を出していた。

夕方からは、カラフルな浴衣を着た女子社員や若い男子社員がちょうちんで明るく灯った「やぐら」を囲んで、輪になつて踊りだした。一時間ほどして盆踊りが終わった。

さあ、カラオケ大会が始まった。

「これから、部の対抗のカラオケ大会を始めます。各部の幹事は代表者を数名決めて下さい！」

と、マイクを通して司会者が言った。

「俺が、出よう！」

私は酒のせいもあつて幹事に向かつて手を挙げた。三番目と早かった。

「では、調査・海洋部の呉さん！よろしくお願いします」

私は司会者が立つ舞台上上がった。前もって伝えていた選曲のメロディーがスピーカーから流れた。その曲は「大阪し

ぐれ」であつた。マイクを持ち歌い出した。

「ひとりで、生きていくなんで、できないと、：大阪しぐれ」

順調の滑り出しであつた。間奏曲が入った。

「うまく歌えているなあー」

と思つた。無事に三節まで歌え終えた。会場から大きな拍手が起こつた。女子社員に促されて、三歳になる次女のセヤンが壇上にながつて来て父親のほおにキスした。また、拍手が上がつた。上手くいったのであつた。

「私の十八番の『大阪しぐれ』を先に歌われてしまった。呉さんの方が上手だなあー」

と、柴田が壇上から降りてきた私に言った。練習の成果が発揮されたのである。

「セヤン、お母さんは？」

と、降り立つた私は尋ねた。

「お父さんが歌う前に、お姉ちゃんと妹を連れて家に帰えちやつた」

と、セヤンは答えた。妻は夫の歌を聞くのは恥ずかしくて、

夫が歌う前に帰ってしまった。

「上手いところ、聴いて欲しかったのに……」

と、私は残念であつた。来年も出場しようと思つたが、「盆

踊り大会」はこれ一回限りで終わった。会社の近所の住民から抗議が来ていた。騒音迷惑と言うことである。

このカラオケ大会で、歌うことに自信を持ち始めた。積極的にスナックで歌うようになった。そのおかげで曲数は増えた。韓国の演歌である恋心を歌った「カスムアブゲ（胸が痛い）」を原語で歌えるようにまでなった。何とか、サラリーマンの必須科目である（？）カラオケは合格したのである。

定時の就業時間が終わり、数人の同僚と職場で雑談をしていた。

「呉さん！奥さんから電話ですよ！」

と、電話を受けた若い社員が言った。電話口に出た。

「お父さん！大変なことが起こった」

「どうしたんや？」

「セヤンが子供の自転車で車のドアに傷を付けたの」

「それでー」

「付けられた若い男が、今家に来ている。『弁償しろ』と言って」

「停とまっている車に傷を付けたのか？」

「違うの。走っていた車に傷を付けたみたい」

「何！走っていたのか。わかった」

セヤンが停とまっていた車に傷を付けたと思い込んでいた。停とまっている車に傷を付けたのなら、弁償しなければならぬと考えていた。

「今、セヤンはどうしている？」

「泣きつかれて、二階で寝ている」

「まだ、その男はいるのか？」

「玄関の外にいる。お父さんが帰ってくるのを待っていると
言うので」

「今すぐ、家に帰るから、待たしておけ！」

「相手に言っておいたから」

「何を言うたんや？」

「うちの亭主は、怒ったらヤクザのような怖い男や。なめた
らあかんよ！」

「ヤクザ…？」

「誰がヤクザや」と思いながら、急いで会社を出た。自宅の近くの道端で頭の毛を染めた若い女がしゃがみ込んでタバコを吸っていた。玄関の前には赤い色の新車が停とまっていた。そのそばに若い男が立っていた。タバコを吸っていた女はこの男の連れとわかった。

「この傷、どうしてくれるのか！」

と、若い男は私の顔を見るなり、車の傷に指差して怒鳴っ

た。

「ちよつと待て！おまえなあ、走っていて車に子供と接触したら子供のことが気になるのが普通違うか？警察で話をつけよう！」

と言いつ返すと、若い男は何やら困った顔をしていた。

「わかった。この車で行こう―」

と、若い男は連れの女を呼び、私を助手席に乗せた。雨が降り始めた。妻は玄関の外に出て来て、助手席の窓から私に傘を渡した。三人を乗せた車は発進した。

「おまえ！どこに連れて行くんや」

「黙って乗っておれば良い！」

「東明寺」のすぐそばを流れる新河岸川の縁にある、古ぼけた交番所に行くものと思っていた。降ろされたのは交番所と正反対の人影の少ない家並みの一角にある「板金屋」であった。その家の中に連れられた。中には六、七人の男女がいた。

「そこで、しばらく待ってくれ！」

と若い男が言うと、中にいる白い作業服を着た体格の良い男と何やら話し始めた。

（俺がどこにいるのか、お母さんに知らしておいた方が良いなあ）

と思った私は、傘を持って外に出た。近くには公衆電話はなかった。通りの向こうに赤ちようちんの明かりが見えた。ちようちゃんには「焼き鳥」と言う字が書いてあった。そこまで傘を差して歩いて行った。

「すみません。電話を借りたいのですが？」

「良いですよ。その電話を使って下さい」

店の中には女主人がカウンターにいた。客はいなかった。家に電話を掛けた。

「お父さん、今どこにいるの？」

「警察ではないのは確かや。変なところに連れられた。あいつの仲間達のおるところみたいや」

「お父さん！すぐに逃げるのや！」

変なところに連れられたことを知った妻が心配して言った。そのとき、受話器から車のエンジンの音が聞こえた。

「さっきの男がまた車で来た！早く帰ってきて―」

「わかった。今から、すぐに家に戻る！」

受話器を置くと、店の女主人に礼を言つて、傘を差さずに手に持って雨の降る中を猛ダッシュで家に向かって走って行った。妻や子供達に手を出すのではないかと心配した。

やつと、家に着いた。走っている間の時間の経つのが遅く感じた。

「おまえ！話が違うぞ！」

一人で車に乗ってやって来たその若い男に胸元をつかんで怒鳴った。男は黙っていた。

「今度は警察に行くぞ！近くに交番所があるから、そこに行こう！」

「警察に行くのですか？どうしても……」

「そや、警察や！」

男は今にも泣き出しそうな顔になっていた。

へさつきまでの威勢はどこにいったのか？仲間に見放されたのか？」

男の顔を見て、そう思った。

男は助手席に座った私の指示どおりに、交番所に向かって赤い車を走らせた。交番所には四十代ぐらいの警官が一人机に向かっていた。

「どうしたのですか？」

と、その警官は入って来た二人に尋ねた。私は警官に名刺を渡し、事情を話した。話しを聞き終えた警官が若い男の顔を見て、

「おまえ、以前どこかで会っているな！」

と言った。言われたその男は黙ってうなだれていた。

「おい！どんな傷か車を見せろ」

警官はその男を連れ出し、交番所の前に停めてある車のところに行った。しばらくして、

「あんな傷で、弁償しろとはないだろう！」

交番所の中に戻って来た警官は私の前で若い男に言った。

男は黙ってうなずいた。そして若い男は何も言わずに、赤い車に乗って去って行った。

「暴行などの事件については警察が関与しますが、このような賠償問題は民事事件なので警察は関与できません。ただ、連れられ板金屋は以前から問題のある店で、警察が目を付けている最中です。あの男もマークされています」

警官は居残った私にそう説明した。

へそだったのか。それであの男は警察に行きたくなかったのか！」

と納得した。その警官に礼を言って家に戻り、待っていた妻に一部始終を話した。話を聞いた妻は

「弁償せずに済んだのね。さすがに、お父さんは男だった！」

と夫をほめた。ほめられた夫は、

「……俺は男、違うのか？」

と、妻に言い返した。この日の出来事は、私と妻の心臓が今にも破裂しそうなほどドキドキした事件であった。

「お互い、昔のように若くはないなあ……」

三十歳半ばになった夫婦は体力の衰えを少々感じた。

妻の病氣

「そろそろ手狭になったので、引越しませんか？」

妻は三女のミヤンに母乳を飲ませながら夫に言った。

「そうだなあ、チョニヤンも小学一年生だしなあ。」

晩酌しながら、一階の六畳間にあるテレビを子供達と一緒に見ていた私は部屋を見回した。この家に来たときは次女が

赤子であった。今は三女が赤子で次女は三歳になっていた。

一人増えることはこんなに部屋が狭く感じるものかと思った。

「どこか良いところがあるだろうか？借りるとしたら、これよりも広い家でなければいかんし、チョニヤンの通う小学校区を変えるのも面倒だし」

と、妻に言った。

「借りようとは思っていません。家を買おうと思っっています」

と言う妻の言葉に、私は驚いた。家を買って今まで想像もしていなかった。母親が住む実家や兄達三人の夫婦が暮らしている家も借家であった。

「家を買おうと言ったって、そんな金がどこにあるのか？サラリーマンになって三年ほどしか経っていないのに」

「何とかかりますよ」

「何とかなると言っただって、ないものはないだろう！」

「何とかなると言っているでしょう！」

二人の間で険悪なムードが漂い始めた。長女と次女はその気配を察して二階に上がってしまった。

「家なんか持たなくても良いのだ！革命家は自分の家なんか持たないんだ！借家で十分だ」

アルコールのせいもあってか、テンションが上がってきいた。

「何が革命家なの。革命家と持ち家とは何の関係があるの！」

と言うと、あきれ返った妻は赤子を抱いて二階に上がった。私は学生運動の時代に教わった「革命家は安住する家を持たず、革命のために転々として生きて行くものだ」と言う言葉を思い出していた。

「お父さん！頭金は何とかなりそう。父親が電話で融通してくれると言ってきた」

と、妻は翌日会社から帰って来た私に言った。昨日、妻は家の頭金を借りるために自分の父親に電話をしていたのであった。私は妻の父親と会ったことはなかった。

「本当か！」

妻から聞かされた私はそう答えてしまった。要するに、先立つお金が心配であった。融通してもらえとなれば、話は別である。しかし、昨夜言った「革命家たるものは家を持たない」と言うこの言葉は、

「一生忘れない。あのときの言葉を！」

と、妻から言い続けられる三つ言葉のうちの一つとなるのであった。

日曜日になると、妻は家を買うことに同調した私を連れて、家探しのために不動産屋に訪れた。不動産屋の社員の案内で、学区区の変わらない新河岸川の辺ほとりにある中古住宅を見に行った。土地の面積は二十坪で二階が六畳二間、一階は六畳と五畳の二間である。建ぺい率六十パーセントであるため、庭が少々あった。今の借家に比べると、二階の部屋が四畳半の二部屋から六畳の二部屋へと、また一階の六畳と三畳の二間から六畳と五畳の二間へと広くなる。

「将来、この庭に部屋を増築しても問題はありませんか？」

と、庭があるのには気に入った私は案内した不動産屋の社員に尋ねた。

「大丈夫ですよ。建て増しをしてもわかりませから」

と微妙な発言をした。問題はないとはつきり言わなかった。売ってしまえば、後は不動産屋には関係のないことと言うこ

とであろう。

（調子の良いことを言うものだ）

と思った。

「この物件は、今の俺達にとって身分相応だと思うが、お母さんはどう思う？」

と、妻に問いかけた。

「そうね。父親が融通してくれる金額を想像すると、このぐらいで妥協しなければ」

私と妻はいくつかの物件を見た中で、想定しうる融通金額と家の大きさや長女の通う学区を考えると、この物件で手を打つことにした。父親からの金額が入金された後に契約と言う段取りとなった。

ところが、持ち家を探しているときから、妻は眼の不調を訴えていた。目に映る視界が狭くなってきていた。

「明日、眼科に行ってくるから」

と、妻は自宅に戻って来た私に言った。眼科の医院は自転車で十分ほど行ったところにある。医者は年配の女性で、私も何度か診てもらったことがあった。

翌日、会社に電話が掛かってきた。

「どうだった？」

電話を取った私は不吉な予感がした。大した病気でないなら、わざわざ会社に電話をしてこないと思ったからである。

「…」

「どうしたんだ！黙っていてはわからん」

と、妻の返答に不安を感じながら言った。

「このままでは、めくらになると医者から言われた…」

と、妻は泣き声で答えた。

「何と言う病気や？」

「原田氏病（発見した人の名前）と言って、原因のわからない病気らしい…」

「それで、医者はどうせと言った？」

『すぐに、新所沢にある防衛医大に入院するように』と言われた。紹介状を書いてくれた」

「そうか、わかった。今すぐに帰る！」

受話器を置いた。頭の中は真っ白だった。課長の水山に事情を話して、会社を早退した。本川越駅からバスを乗り、家に向かった。日中のバスの乗客は自分一人だけであった。

「一体どうしたら良いのか？妻がめくらになれば、小さい子供三人をどうして育てていけるのか」

走るバスの中で妻の病気よりも自分がどのように子供三人を育てていけば良いのかを自問した。自然に涙がこぼれだ

していた。家に着くと、長女と次女は近所の子供達と外で遊んでいた。家の中では妻が目には涙をためながら、入院のために持って行く衣類をはっきり見えない目で整理していた。そばのベビーベットには三女の赤子が寝ていた。私は黙って妻のそばに行き、衣類の整理を手伝った。私の目にも涙があふれていた。

私は、すぐに川越市役所に自転車で飛んで行った。市役所の一階の受付で児童相談の窓口を尋ねた。受付の女性からその部屋を教わり、児童相談係に行った。

「すみません、子供のことで相談したいことがありまして…」

と、カウンター越しから、中にいる年配の女性職員に声を掛けた。

「どうしましたか？」

「実は、…」

妻がすぐに入院しなければならないことや、小さい子供が三人いることなどを話した。

「それは、大変ですね。親せきはいないのですか？」

「大阪からこちらに来たもので、近場には親せきがないのです。上二人の娘は大阪に住んでいる女房の姉のところまで面倒を見てもらえることになっていますが、なにぶん下の子は赤ちゃんなので、『預かることはむずかしい』と姉から言われ

まして…」

「わかりました」

年配の女性職員はそう言うと、近くにいた男性職員に向かって、

「どこか、欠員のある乳児院を調べて下さい」

と指示したのである。

「この人は児童相談係の係長だろう」

と思った。電話を掛けて、欠員のある乳児院を探していた男性職員が、

「久喜の乳児院に欠員あると言うことです」

とその女性に言った。

「今日でも入院できるか聞いて下さい」

「わかりました」

指示された男性職員がそのことを電話で応対している相手の人に尋ねた。

「大丈夫と言うことです」

と、その男性職員は指示した年配の女性職員に振り向いて言った。

家に戻り、妻と二人で三女の赤子を乳児院に預けるための準備をしていると、大阪から妻の姉と八歳下の弟がやって来た。

「色々と面倒をかけます。よろしくお願いします」

と言いながら、私は深々と頭を下げた。

「お姉ちゃん、また面倒をかけます」

妻も申し訳なさそうに言った。

「良いよ。セヤンが生まれるときはチョニヤンと暮らしているし、ミヤンが生まれるときはチョニヤンとセヤンと一緒に暮らしているから、慣れっこよ！」

と、八尾市に住む義姉が力強く言った。誠に有難いことであると義姉に感謝した。当初は次女だけを預けようと思っていたが、学校が夏休みのために小学一年生の長女も預けることにした。

二人の娘は自分達の叔母おばと叔父おじに連れられて、その日に家を去った。次は、三女のミヤンの番である。乳児院への荷物の準備が終わると、ミヤンを連れて会うことになっていた児童相談所の広場に行った。広場には川越市の車が待っていた。車の中には二人の男性が座っていた。私は三女の赤子を抱き、後ろの席に座った。一歳近くになる三女は黙ってひざに座っていたが、車が久喜市にある乳児院に近づくと、何を感じたのか？父親の胸に抱きつき大声で泣き出した。乳児院までは一時間近くは掛かったであろう。乳児院に着くと、二人の女性職員が迎えに出ていた。

「この子ですか？」

と、一人の女性は助手席から出て来た男性の職員に言った。車から出て来た私は泣きながら自分の胸にしがみついている三女をその女性に渡そうとしたが、離れようとはしなかった。

「よし、よし、良い子だから」

と言いながら、その女性は三女を胸から引き離した。私の方に向いて泣きじゃくる三女をもう一方の若い女性に渡し、乳児院の中に連れて行くように指示した。連れて行かれる三女を見つめる私の目頭は熱くなっていた。

「あの…。これは娘の衣類ですが」

妻と共に用意をしたミヤンの荷物を女性に差し出した。

「このような物は受け取れません。ここでは私服を着ることは禁じられています」

その女性はきつぱりと断った。私服を差し入れることができない両親もいるようである。

後で聞いた話であるが、この乳児院は〇歳から三歳児までの子供を預かる施設で、子供達の母親には罪を犯して刑務所に入っている人が最も多いと言うのである。ミヤンのようなケースはまれであると言う。

「帰りがたがるので、一ヶ月間は面会に来ないで下さい。慣れるまでは」

と、その女性は別れ際に言った。別れるのがつらかった。夕方に、返された衣類を持って家に戻った。明かりをつけずに、家の中で妻が一人泣いていた。

翌日の朝早く、妻と二人で防衛医大病院に向かった。本川越駅から西武新宿線で新所沢駅に行き、新所沢駅から五分ほどタクシーに乗ったところに病院があった。設備の整った大きな病院であった。受付の女性職員に町の眼科の医者からもらった紹介状を手渡した。そして二人は眼科病棟に連れられた。そこで担当医師から問診を受けた後、入院の手続きをした。しばらくして、看護婦が二人を妻が入る病室に案内した。その病室にはベッドが六つあり、入院している女性患者がすでに三人いた。出入り口に最も近いベッドが妻に与えられた。妻は家から持って来た寝間着に着替えた。

「一日でも早く、退院できるように頑張ってください！」

と、別れ際に妻に言った。

「わかってている…」

「会社の仕事が終わったら、毎日来るからな」

「そうしてくれる」

「うん…」

私は病室を出た。病院から新所沢駅まではタクシーを乗らずに歩いて行った。誰もいない借家に早く帰る理由はなかった。

た。

「家族はばらばらになってしまったなあ…」

と、歩きながら一人つぶやいた。

この日から、妻に起こされることなく、一人で起きて朝食を取り、玄関の鍵を掛けては会社に出掛ける毎日となった。私の背に「行っていらいっしょい！」と言う声を掛ける家族の声はなかった。仕事が終わると、会社の最寄りの駅から西武新宿線を乗り、新所沢駅に降りて、妻が入院している病院に毎日通っていた。面会時間が終わるまでいた。

家に帰るのは、午後十時を過ぎていた。私は「焼きそば」が好きだった。妻の見舞いから帰ると、毎夜のように簡単にできるインスタントの「焼きそば」を酒のつまみも兼ねて食べていた。そのうち、胸焼けがして気分が悪くなってきた。なんば「焼きそば」が好きだからと言っても、インスタント食品の食べ過ぎであった。

さすがに、インスタント食品には参ってきた。当時半ドンであった土曜日の午後と日曜日は妻と病院の中にある食堂で昼食と早い夕食を取った。妻の病気には食事制限はなかった。病院から出される食事は貧弱で、当然ごちそうと言えるものではなかった。

「お父さん、自分の洗濯物を持っておいで。私の物と一緒に洗濯するから」

病院を通っているうちに、妻はそう言った。

「そんなことをしても良いのか？」

「大丈夫。この病院の洗濯機には乾燥機も付いているし。私の分だけではお金もつたいないから」

「わかった。明日から持ってくる」

私は二日おきに自分の洗濯物を妻のもとに運んだ。二人で病院内にあるコインランドリーに行つては、洗濯物が乾燥するまでコインランドリーで会話を楽しんだ。しかし、子供達の話は一切しなかった。担当医師から「プレッシャーの掛かるような話はしないで下さい。この病気は精神的な部分も原因があるようだ」と言われていたからである。妻もそのことを知っていたのか、あえて子供のことについて聞こうとはしなかった。治ることが先決なのであった。二人は子供のいない夫婦のように話し合っていた。

会社に不動産屋から電話が掛かってきた。妻の父親から融通される金額が入金されたときに契約と言う段取りになっていた中古住宅の物件のことである。

「家に何度も電話を掛けたのですが、奥さんがいつも不在のよう。それで会社に電話をさせて頂きました」

「そうですか。申し訳ありません。実は女房が入院してしま
いまして」

と、電話に出られなかったことを相手にわびた。

「そうでしたか」

「そう言う訳ですから、その物件についてはなかったことに
して下さい」

「わかりました。お大事に」

そこで、電話は切れた。

八月が終わろうとする頃、妻の弟である義正が姉の見舞い
を兼ねて長女のチョニヤンを連れ帰って来た。学校が始まる
のである。

休日の日に、帰って来たチョニヤンを連れて妻のところ
に行った。

「お母さん、大丈夫？」

と、チョニヤンは母親を見るなり言った。

「段々と、人の輪郭が正常に見えるようになってきている」

と、ベッドに横たわって点滴を受けている妻がにこやかな
顔で言った。

「セヤンはどうしていた？」

「うん、八尾のおばちゃんかママと呼びなさいと言われ、マ

マと呼んでいる。別れるとき、『お姉ちゃん、お姉ちゃん、置
いていかないで！セヤンも一緒に帰る』と言って、泣いてい
た」

「そうだったの…」

「もうしばらくの辛抱だ。すぐに皆と一緒に暮らせるように
なるから」

と、それ以上大阪にいるセヤンのことに言及しなくなっ
た私は言った。つらくなるだけであった。そして知っていた。

この日、久喜の乳児院にいる三女のミヤンが一歳の誕生日を
迎えていることを。そのことは妻も知っていたが、妻も口
は出さなかった。

「いつ頃、退院できそうですか？」

と、私は診察しにきた担当医者に尋ねたが、医師はいつま
で入院するのかわかり言わなかった。

チョニヤンの学校が始まった。毎日のようには妻のもとに
は行けなくなっていた。会社が終わると、すぐにチョニヤン
の待つ家に帰って、夕食の準備をしなければならなかった。

「今夜は、スパゲッティを作ってみるか！」

私は妻が良くスパゲッティを作っていたことを思い出し、
初挑戦をすることにした。会社の帰りに、スーパーに寄って
めんを買った。家に帰り早速料理に取り掛かった。

「おかしいなあ。スパゲッティのめんは、真ん中に穴が空いていたか？」

作っているうちに、めんの違いに気付いた。管状のマカロニであった。その日の夕食はスパゲッティからマカロニに化した。マカロニはスパゲッティのように多く食べられるものでなかった。朝食は牛乳にトーストと卵焼きと言うワンパターンであった。この様子を見ていた二軒隣の柿田の奥さんは「おかず」を作っては私と長女のもとに運んでくるようになった。

柿田の奥さんは、私の家族がこの借家に引越ししてきた一年後に熊谷市かやって来た。亭主は大手スーパーの社員で、川越市にある同スーパーに転勤してきた。子供は女子二人いた。上の子は信ちゃんと言い、チョニヤンより三つ年上であった。下の子は広恵ちゃんと言い、チョニヤンより一つ年下であった。長女と次女とはすぐに仲良くなり、良く遊んでいた。

会社から帰ってくると、

「お父さん、先生からほめられた」

と言って、チョニヤンはノートに書かれた日記帳を見せた。日記帳には「洗濯一人でできて良かったね」と、先生からのメッセージが書かれていた。私はにやりと笑った。

「良かったなあ」

と言ったものの、後でまたチョニヤンの洗濯した物をもう一度洗っていた。

休みの日、病院から帰ってきた二人は、風呂を沸かすのが面倒くさくなって、自転車に乗って、銭湯に出掛けた。銭湯は木造で、昔風の湯船が大小二つあった。チョニヤンは銭湯に入るのが始めてであった。洗い場にはシャワーが付いていた。借家にはシャワーがなかった。チョニヤンは洗い場の鏡を見ながら嬉しそうに髪を洗っていた。湯から上がると、番台のそばに置かれている、扉が透明な冷蔵庫から冷たい牛乳ビン二本取りだし、二人で飲んだ。美味しかった。大阪で住んでいた頃の銭湯で飲んだ牛乳の味を思い出しては懐かしくなっていた。

入院してニヶ月が経った。妻が退院する日がやって来た。チョニヤンと二人で病院に迎えに行った。妻はにこやかな顔をしていた。病室にいる患者に挨拶をし、病院の窓口で入院費を支払い、病院を出た。

「いつ、再発するかわかりませんから、気を付けて下さい」と担当医者が言ったが、妻が再発することはなかった。

退院の翌日、チョニヤンが学校に行っている間に会社から

車を借り、久喜市にある乳児院に私と妻はミヤンを迎えに行った。途中、菓子屋で大きな段ボールに入った駄菓子を買った。乳児院に入っている子供達のお土産である。乳児院の職員から、予算の関係で十分な量のお菓子は与えていないと聞いていた。

乳児院に行くのはミヤンを連れて行ったときの一回だけであった。勘を頼りに乳児院に向かったが、不思議に道に迷うことがなくたどり着いた。前もって、この日に迎えに行くことを乳児院に連絡をしておいたので、退院の手続きは早かった。女性職員にお菓子の入った段ボールとミヤンの私服を手渡し、乳児院内の一室でミヤンを待った。

しばらくして、職員の女性に抱かれて、私服に着替えたミヤンが部屋に入ってきた。その女性は連れて行ったときにミヤンを私の胸から引き離れた人だった。

「ミヤンちゃんをお渡しします」

と言ってその女性が、両手を差し出した妻にミヤンを渡そうとしたとき、

「わあー」

と泣きだして、ミヤンはその女性の胸にしがみついた。連れてきたときと正反対である。その姿を見た妻は、

「忘れてしまっている！母親の私の顔を…」

と、大粒の涙を流しながら声を上げた。

「幼い子供には、母と一緒に暮らすことが大事なことです。母親と離れて暮らすことは子供にとって決して良い環境ではありません」

と言いながら、その女性はミヤンを胸元から無理に離して妻に手渡した。

セヤンが我家に戻って来た。やっと、ばらばらになっていた家族全員が集まった。長かった二ヶ月間であった。私と妻は家族がそろった喜びを改めてかみしめた。

作品論評

本作品は、在日コリアンの呉太朋が日本の企業で働く中で経験した様々な思いや苦難を中心に、彼の半生を描いた長編自伝です。

外国人が日本の企業に就職することが難しい時代、博士第一号および外国人第一号として雇用され、管理職からの降格をも経験しながら定年まで職務を全うする姿は畏敬の念さえ抱かせます。

幼い頃から在日コリアンとしてのプライドを持ち続け、良い意味で突っ張って生きてきた彼の人間的な強さが全文にわたって感じられます。

始めて祖国を訪ねた際に、韓国国民でさえ自分のことを同国人だと思っていないこと、日本でも就職等で差別されているということから、自分が無国籍人かも知れないという思いに駆られる場面は胸がつまり、在日の方だけが感じる独特の心境を垣間見た気がしました。

日本人はむろん、在日コリアンの方や外国人の方、またそれに関わる方など、一人でも多くの人に読んでいただき、考えて欲しい作品です。

ぜひ、友達に本作品を紹介していただきたいものです。

一読者より